

ヒンズー教の梵論

【その1】

ヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタ
～梵我物峻別一如論学派による『妙格説』、『大魂魄説』、『梵身説』、『異性同質説』、『親疎一如説』とその神学的な奥義の特色～

霧島 怜 [Rei S. Kirishima]

序

- 一. 認識論の概要
 - 二. 人我論の概要
 - 三. 梵の神秘的な性格を論ずる「妙格説」
 - 四. 梵の超徹的な霊質を論ずる「大魂魄説」
 - 五. 梵身の性質を論ずる「活現成身説」
 - 六. 梵我物の性質的な関係を論ずる「異性同質説」
 - 七. 梵我物の親疎関係を論ずる「親疎一如説」
- 結語にかえて～上説の神学的な奥義の特色

註と文献

RESUMÉ

序

ヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタ⁽¹⁾によると、梵が一切の世界とその万我物事象の絶対的な霊我であって究極の本末因であり、一方、万劫の我物事象の世界は、梵の自然身の顕密真相でありながら、梵身活現成の様態である。更に、梵、万我、万物、事象とその万徳千化は、本来の自性において異なるので峻別すべき世界である一方、存在の実質において、永遠に切り離す事が出来ないで『一如』の世界として理解されている。よって、『梵我物の峻別一如性』は、ヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタの世界観の大哲理であると言える。

ヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタ
梵我物峻別一如論学派は、ラーマヌジャ (Rāmānuja, ¹⁰¹⁷/₁₁₃₇～) を太祖とするヴィシシュヌ教の一団であって、ヴェーダーンタ学派の宗教哲学的な思想を正伝する学派である。本学派は、ボダーヤナ (Bodhayana, I. A. D.) によって書かれたブラフマ・スートラを根本経典とし、ヴィシシュヌ教の公理、ヴィシシュヌ神とその救済的な恵愛を讃美し、ヴィシシュヌ神への親愛を生き方の根本としていたタミル人の詩人達 (Ālvārs) と、ヴィシシュヌ教の定理を哲学の観点から解釈していた聖哲 (Aragiyas) の伝承から

生じた学派である。ポイガイー・アールヴァール (Poygay-ālvār) とブータット・アールヴァール (Bhutatt'-ālvār) が初代のアールヴァールと見做されているが、ラーマヌジャに先立って活動していたナータムニ (Nāthamuni, VII-VIII. A.D.) とヤームナーチアーリヤ (Yāmunācārya, X. A.D.) に否定出来ない強い影響を与えた。

ラーマヌジャが提唱していた教理を土台とするヴィシスタードヴァイタの聖哲の中で、彼の門弟であったクレシア (Kureśa), プラナタールティハラ (Prnatārtihara), ダーシアラティ (Dāśarathi), アンドラプールナ (Andhrapūrna), ヴァラダヴィシシュ (Varadaviśnu), ヤティシエカーラ・バーラタ (Yatiśekhara-bhārata), ゴヴィンダ (Govinda), ヤジナムールティ (Yajñamūrti), パラシアラ・バッターリヤ (Parāśara Bhattārya), ナンブリ・ヴァラダリヤ (Namburi Varadarya) とピッライ・ロカーチアーリヤ (Pillai Lokācārya) は、本学派の教義を設定し、ヴィシスタードヴァイタの「教父」と称するに相応しい者である。更に、ラーマヌジャとその門弟が唱道した梵論、万我論、物質論と解脱論の定理を聖典の啓示と哲学の立場から、唯よりも、論究し、辯護しながら、それを著したのは、大論辯家ヴェンカタナータとも呼ばれるヴェーダーンタ・デーシカ (Venkatanātha, 1268~
Vedānta-desika, 1369) である。そして、後世に活動し、ヴィシスタードヴァイタ的な教理を深め発展させたのは、スダルシアナ・スーリ (Sudarśana Sūri, $\frac{X}{XIV}$ A. D.), サイラ・シリニヴァーサ (Saila Śrinivāsa, XV. A. D.), カツリ・ランガチアーリヤ (Katsuri Rangācārya, $\frac{XV}{XVI}$ A. D.), ランガラージャ (Rangaraja, XVI. A. D.) とアナンターリヤ (Anantarya, XIX. A. D.) である。

本論文は、神仏梵論、人間論や哲学を傍観する学者の態度ではなく、知行合一や修証一如という人生の姿勢をもって勉学に励みながら、インドの梵学と哲学、スコラの神学と哲学およびその比較的な思索に著しい貢献をした者の深察を元に、ヴィシスタードヴァイタの聖典とその註釈書の単なる語原的な分析ではなく、ラーマヌジャとヴェンカタナータが提唱していた教理を中心に、ヴィシスタードヴァイタの世界観 (宇宙観又は梵我物論ともいう) の核心であって基盤でもある『梵論』、特に、その根本哲理を慎重に考察しながら、ヴィシスタードヴァイタの梵学、スコラの神学と仏教の仏身論に通用する概念をもって、独自に著述したい。そして、この考察の根本的な資料と方法は、ランガチアーリヤ (Rangacharya M., 1861~
1916), チャリ (Chari S.M.S), ダスグプタ (Dasgupta S., 1885~
1952), クマラッパ (Kumarappa B.), カルマン (Carman J.B.), ペレイラ (Pereira J.), パッリンデル (Parrinder G.) 等と、比較宗教論の世界的な権威であるエリアデ (Eliade M., 1907~
1994) の論著に頼る。

この論文の主題として、ヴィシスタードヴァイタにおける「梵論」の根本的な哲理の神学的な特色を略解することである。本書では、梵の匹儔なき性格を論ずる「妙格説」、梵の遍在的と同時に超越的な霊質を論ずる「大魂魄説」、梵身の性質とその根本的な形態を論ずる「活現成身説」、梵と宇宙万有の性質的な本来の関係を論ずる「異性同質説」および、梵と宇宙万有の親疎関係を論ずる「親疎一如説」の根本哲理の真義を略説する。それと同時に、当哲理が孕んでいる神学的 (当然の結果として、宗教〔身心学道〕的、即ち、人間論と人倫論に方向づける教理的) な奥義、その趣旨や示唆的な意図に注目したい。

* (論文中の引用文は、「文字」通りの訳ではなく、術語の本義と文脈の意味を最優先した「英文」からの私訳である。)

一、認識論の概要

ここでは、ヴィシスタードヴァイタが唱道する認識論全般を詳解するのではなく、一切世界の万有千化の实在性とその実相の把握を中心にラーマヌジャとヴェーンカタナータの見解の略述に留まる。その内容を4項目に分けて下記の如く簡約する⁽²⁾。

宇宙万有が真に存在する。ヴィシスタードヴァイタによると、宇宙とその万我物千化は非实在・実存する完全な虚無・性質徳差の一切を有しない实在・同時有無・超越者の虚偽顕現や全面的に感知不可能な事象ではなく、多種多様な性質徳力を内容とし本来の実相を自現しながら、感知的な把握と理解を可能とする世界である。その中で特に、絶対不依の霊我たる梵と本来依立的な命我たる神我と人我の永存が重視され、その役割も強調されている。更に、宇宙の物質と諸現象も万我独自の妄想、空想や虚構ではなく、現に実存する世界であると一貫して見做されている。逆に言えば、いわゆる「非存在」・「非実有」や「絶無」というモノは実存しない以上、有常でなければ無常でもない、起滅しなければ隠顕する事もない、感知に引掛かる事がなければ迷悟の対象にも成り得ない、実有の源泉でなければ既に実存する万我物事象の基盤や本体でもあり得ない。斯くした絶対虚無や完全絶滅等は全人類の存在的な経験と論法に反するだけではなく、現実にも根柢が一切ない荒唐無稽 (*notio vuota sine fundamento in re*) である。次に、「実存する絶対虚無」と「实在と非实在の同一性」の問題である。一つは、「中身が全くない有」や「性質徳差を一切有しない存在」、も一つは「存在する事と存在しない事は同一であり」又は「現実と虚実が同一である」という意味合いを包含する語句である。それらの語も万代万人の経験と合理の外であり、未だ体験、観察や実験された事のない事理であって、同時両立や共存の不可能な事柄を組み合わせた矛盾の概念に過ぎない。更に、「性質や徳差を有しない存在」とは、性格・質量・本性・本質や万徳力等が同一であり、異性と異質等と称せられるものも実際に同一の存在であって、絶対実有や宇宙万物にも本来、性質徳力の千差万別がなければ万変千化も無いという事になる。しかし、万我物事象の差異は非实在や妄想と観ずるなら、自他の区別、自他の感知・意識や意見の違いもなく、生死病苦、愛憎、因果縁起や虚幻等も、同一のものと認めざるを得ない。ところが、万有千化とその差異の实在こそは、全ての知識、学説、迷悟、正邪や善悪の前提と本末である。万差多様性のない世界は現世人類の身心的な経験範囲の外にある。そして、万有徳力の差異とその実存を認めなければ、世界万物の实在論、虚無論、虚幻論や妄想論等が同様の説であると同時に虚構でもある。更に、宇宙万物を「超絶的な実有の虚偽の顕現」と見做すのも誤謬である。何故かと言うと、超越存在の虚偽的な顕現を裏付ける根柢や正当な理由が一つもない。却って、最高無比の善美德を具有する絶対的な存在は自現する時に当然、自性と実質に合った相を現ずる方が普遍理法に適うものと観るのは自然である。逆に、絶対者の虚偽顕現説を容認するならばこの宇宙の成員である我々の存在と一切の経験も虚偽と認めざるを得ないし、最高存在の性質実相に関する悟知は勿論の事、虚偽説自体も虚偽の範囲を出られない。よって、万有徳力の世界を絶対超越者の虚偽的な顕現であると認める事は出来ない。

有情精神界に属し、命我の一種である人我が一切世界の絶対我たる梵の顕然たる活現成身の一部と見

做されている。人我観の説明を別の折に譲り、ここは自他の世界を感知し洞察する者としての人我の主な特色を簡約しておく。取り敢えず、人我は宇宙万物の一有としての性質の他に、無辺際で無分別の知ではなく、極微の実体であって位格的な知者（persona 位格的な
体験者, 位格者）である。人我は、虚無・虚空や幻影でもなく、必らず何等かの性質徳差を中身とする実在を把握の対象とする知者である。更に、この知者は感知したり、しなかったりする時とその実態も自覚する。

真実と真理の経験としての知識。人我には非実有、同時有無、性質量とその差異のない実在、絶対的な虚無の感知、途切れのない永遠の意識や無分別の悟知という経験（体験）は不可能である。ヴィシスタードヴァイタ学派によると、人我の感知的や意識的な作用と把握は何らかの実有とその徳差を絶対不可欠な前提とするものである。人我の顕在的や潜在的な把握は、夢・幻覚や謬妄の内容を含めて、非実在的や非個別的な事柄ではなく、真実の世界から芽生える個のかつ人格的な体験である。知識は無辺際知ではなく霊我の実態であって霊我から切り離す事が出来ない体験である。宇宙万有とその真相の把握も又、全きの虚偽、虚構、根拠のない空想や単なる錯覚でなければ完全無欠な知でもないが、根本的に、世界実相の正しい理解であって全真理の一面を示す。しかし、人我機能の本質的な欠陥性、征服不可能な虚構性や宇宙万物の天然的な虚偽性を容認するならば、それもやはり万代万人の健全な経験に反する見解であって、非合理的な立場であると言わざるを得ない。よって、一切世界の万我物事象、性質徳力、千差万変、幻想や錯覚、虚偽、迷悟や精神異常による妄想でさえ、非実有や絶無ではなく、真に実存する世界であって、人我の感知的把握と理解の対象であるとヴィシスタードヴァイタは一貫して主張する。

真知とその会得の方便。本学派によると、真知（明知・妙覚・悟知）は宇宙万有の実在性とその実相顕現の健全な把握を本源としながら必要不可欠な条件としている。そして、真理の不可得・感知機能の稟性的な虚偽や虚実・知識の全面不信用や完全無欠性は全人類の存在的な経験と論法および自然理法に反する見解として否認されている。畢竟、人我の感知と論証には限界があるが、実存する宇宙の成分である以上、その本然性質から芽生える機能も根本的に信用に値する活現として看されている。本学派の権威であるヴェーケンカタナータは、“Tattva mukta kalapa”（形而上下界に関する哲理の大全）⁽³⁾の中で悟知確得の正道として三種の方便を説示するが、ここでは、その要点の簡略に留まる。一つは、宇宙万物の実相とその多様な活現の感知的な把握（*pratyaksa*）。吾々の感知は物質世界の把握に適しているがその力量に直接引掛らない梵我の霊の世界も実存する。しかし、感知を透徹し、感覚を天然自性としなない人我は、自からの霊力によって、部分的ではあるが、非物質的な世界の真相も把握し洞察する事が出来る。二つ目は、感知、正しい推論と思慮によって生じた理知（*anumāna*）である。当知の真否と確疑は、哲学、特に形而上学的な前提原理と論理の正誤に因るものである。三つ目は、人間の相対的な悟知よりも、もっと高く位置付けられているのは、神ヴィシユヌの絶対的な権威を浴びているヴェーダーンタ諸典の慧智（*śabda*）である。

一切存在の真相と哲学的範疇。ヴィシスタードヴァイタの聖哲が梵、諸々の命我と物質界の多種形態を実有（*tattva*）と観て来た事は今までの説述からも明かである。梵我物という三界は、各々悉く本然自内性（essentia entis
本来自然の性）とその徳力（attributa
属性, 実態）において永遠に異なるが、かれらの本然実質たる在在や生命自体において根本的に同じ（visistakya ~ identitas in
essere, unitas existentiae）である。要するに、梵が絶対自立的な実有として把握されているのに対し、残りの我物事象は梵に依存する実有として位置付けられている。更に、実存す

る一切の世界は、一方、永遠無尽の生命、遍満無碍の活現、無極の栄福、無上妙智と無限の善美徳を本然性質とする梵と、梵を存在依拠とする万我、更に、依存、制限、生死と変化を本来自然之性とする物質の世界から構成されている。本学派の聖哲によると、諸聖典の中では、梵が本然の性質とその徳力において絶対無限にして不可解の存在であるため、實在・有自体・真如や超越者と称ぜられている。一方、万我物と事象の世界は、無常にして有限であるため、非實在・虚無や幻影等と名付けられる事がある。しかし、それは、万我物事象の實在を排擠する事がなければ、否認を意味する概念でもなく、宇宙万物の天然的な依存性を端的に指摘しようとした原始的な仮称である。却って、同典の中では、万我物事象は絶対超徹的な梵の依存身、活現成身や顕然たる実態として描かれている。それに、梵も又、一切劫界の我物事象とその万徳千化を遍徹しながら超脱し、絶え間なく養成しながら内制する無上の大魂魄として説かれている。斯くして、梵我物は相即不離、峻別一如かつ異性同質的な世界として見做されている。上述のまとめとして本学派に拠る「実有世界の範疇」を図表を以て記す⁽⁴⁾。

二、人我論の概要

梵我物峻別一如論的な人間観の心髄を提唱したのは始祖ボダーヤナ（紀後1世紀）であり、その哲理を体系的に論辯したのはラーマヌジャであった。そして、この人間観の真諦諸相を理路整然と論及したのは有名なヴェーシカタナータである。以下、後師二人の見解を中心に、本学派の人我論の要を略述する⁽⁵⁾。

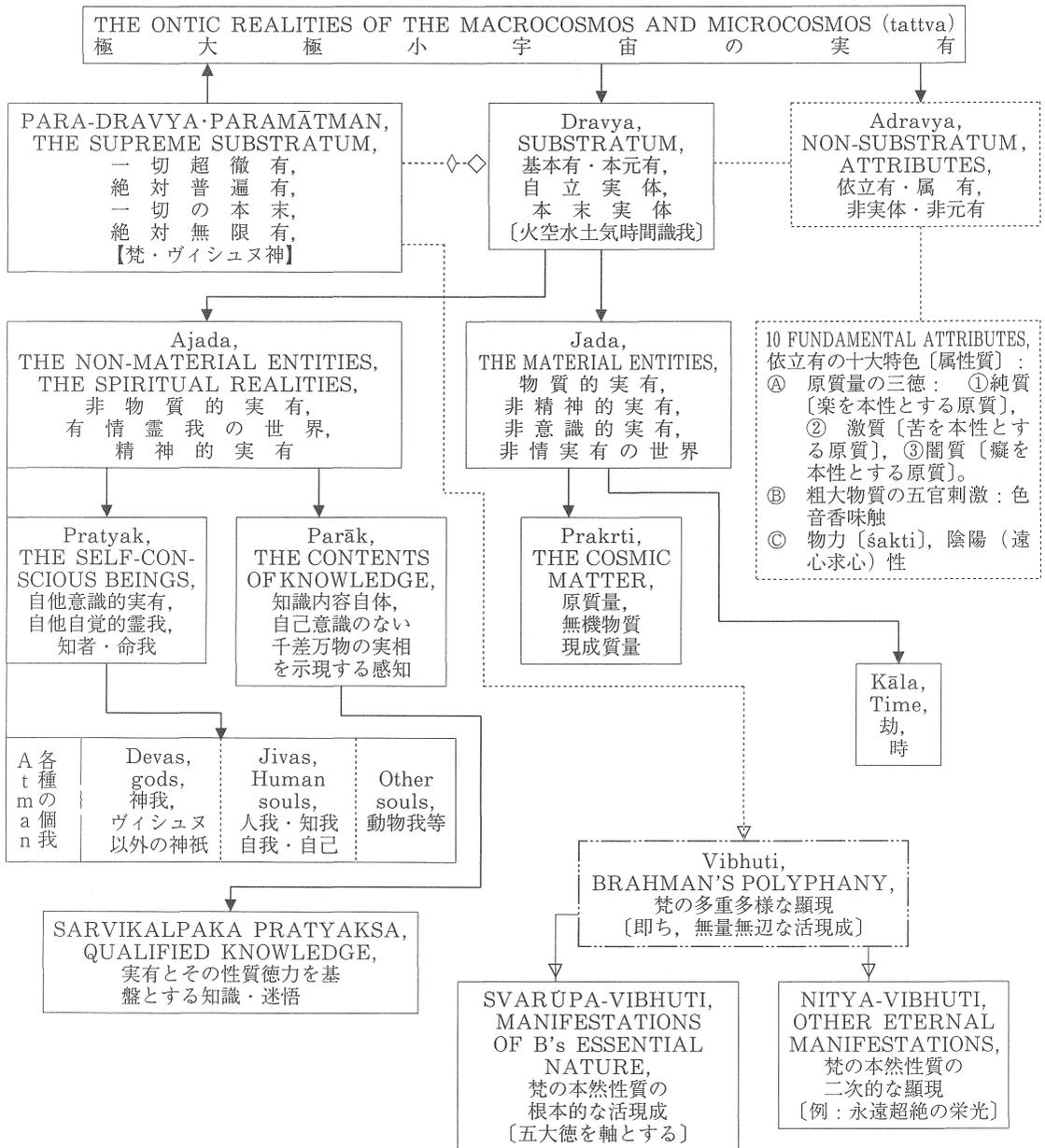
ヴェシスタードヴァイタは下記の人我観を謬見と看し、一貫してそれらを排斥する。

- 一、本来の自己・人我・人間的な霊我という存在は、人体・肉体と同一不二の実有である。そして、人我の精神も物質たる人体の自然で自発的な進化蓄積の産物であって、その多種多様な変化の成果に過ぎない。
- 一、自他意識、思慮分別や正覚大悟の能所は人我の本来自性に属しない。
- 一、人我は、本然自内性において、梵と同一であり、無辺際にして非個的な慧知そのモノである。
- 一、人我は因縁によって自ら結合した身体のみを沁徹しながら養濡^{じゆ}し、この人体を通してのみ活動し得る精神的な個体又は実体である。
- 一、人我は自身全体とその周辺に隙間なく遍在し、活躍する精神的な実有である。
- 一、万有流転、一切無実体、諸行無常および諸法無相という根本原理の或る伝統的な解釈によると、独立した個性を本有とする永遠不滅や有始不滅の実体我はなく、無常変易、偶発的で刹那的な因縁の仮和合の成果としての「吾」しか実存しない。
- 一、人我は隔絶した超越神によって「無」から創造された有始不死の実体者である。

今度は、ラーマヌジャとヴェーダーンタ・デーシカの主張を中心に、ヴェシスタードヴァイタが唱道する人我観の定理を略説する。

先ず、人我や真の自己と称ぜられるモノは、各々物体の非情非精神的な原理たる未開物質（*prakṛti, materia prima*, 原質）龐大物質、肉体、生命、悟知、感覚とそれらの器官や機能と本性的に異なる実有である。「私は足、記憶、悟り、感覚や自他意識である」という体験ではなく、ヴェーダーンタの諸典を初め、「これ

図表～1. ヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタ学派による『実有の大範疇』



は私の足、記憶や生命であり、私は感じ、悟りや自他を意識する者である」という自覚こそは万代万人の共通体験であって、事実上、人間の心身的活動の基本公理である。人我は、自他を超越した非個別的、非実体的、無制限で単一純然たる知覚や意識自体 (*pura cognitio et conscientia*) ではなく、感知、迷悟、自他意識および自身全経験の不変基体であり、その経験を自ら意識しながら創生し、操作しながら享受する位格的な実体 (*substantia personalis*) である。無限純一なる悟知や意識は人類の経験範囲の外にあり、仮りに存在していたとしてもその実存および性質真相の有無自体も人知の外である。全人類の存在的な経験によると、人我は、遍在する単一的な無分別知や意識の全面無常でなければ、純粹悟知の個別的な露現や様態でもなく、「我思う、故我在り」(*cogito, ergo sum*) という位格的な個体である。そして、人間の身心的な経験も又、人我の天然性質の機能と活現である。

次に、人我は自他の内外を自然自発的に把握し、それらの世界各相を思慮と瞑想の対象とし得る識者 (知者・*svayamprakāśatva, persona consciens*) である。即ち、人我は自己内外の世界を多種多様に感知し、その中身を意識しながら自他に顕示する。このような感知的な自覚と啓示的な意識の一如は人我の天然性質の要素として理解されている。

更に、スコラ的な有始不滅の人魂や仏教のある学派が力説する無性や無常の刹那的な和合体ではなく、梵の本来性質の精神的な全機現でもなく、無尽の過劫、現在と来劫においても不生不滅の者であって、梵の現成身を構成する位格者である。もし、人我は有始不滅の存在であれば、永遠の道理である業報が著しく制限される事になる。又、「無」からの創造も因果原理の領域を遙かに越えているからその真相の究明も不可能である。又、もし人我は、文字通りに本来無性で全面的に無常の仮和合体であれば、業法の根本を成す因果縁起、輪廻転生と解脱 (成仏) の道理も無意味であって虚論である。

更に、人我は心身諸活動の作者 (*kartā*) であり、自業の果報たる苦楽の享受者 (*bhoktā*) でもある。梵身の靈的な一現としての人我は生存の真性において制約されているが、稟賦された性質とその徳力の範囲内で自由である。よって、人我は一切の身心的な体験の基盤であり、動不動の自由を有する故に当然、その責任も担う識者である。人我の経験が多種多様な活現の様相であるが、人我自体は天然性質において変成や変滅のない者であって、知者・作者と自業自得の享受者として永遠に存続する依立的な個我である。

次に、梵、人我と物質は本然之性を異にするが本然実質の根本において同じである。人我は梵の自然身体の精神的な一現であり、自らの存在において永遠に梵に依拠し、梵の活現から切り離す事が出来ない者である。そして万人の我が悉く独立した別個 (*individuum*) であって、その感知と意識の機能および内容が異なる事は立証を要としない自明の事理である。

又、人我の本体は、現世的な感覚の範囲を出ている極微の単生者 (*anu-micro-ens*) であると同時にその内制的な活現力が自身全体に及逮する。人我の機能、善美德等と結合した身体が無常変易にして顕現し膨縮するが、人我の稟性自体は恒常不易にして永遠不滅である。人我は、無限の超徹神たる梵と違って、人体内外を遍満するのではなく、自身の特定場所に臨住する極微精妙な単生者であるがその天然力が結合した肉体を隅々まで浸徹しながら活性化する。人我は身体を通じて外界の万我物事象にも働き掛ける事が出来る能力を具えている。

解脱会得の趣向も人我の天然的な性向である。この性向は次のような事理によって裏付けられている。

先ず、梵と人我とは異性同質的な実在でありながらも、人我が梵に依存する者である。次に、梵は、自らの一現なる人我の先天的な苦悩等を無尽劫に互って許容したり堪忍したりする事が梵の慈愛等に反するから、とても容認し難い。しかし、人我の解脱達成は、梵による内外的な強制ではなく、人我本性の一要素なる自由意志とそれに適う知行一致による自業自得である。ヴィシスタードヴァイタの両大師によると、人我の実存過程においては、下記の三種様態が見分けられる。

- 一、現世的な繫縛。人我は完全な解脱への性向を保持しながら、前世業の果報たる物質との結合によって内外的な束縛を蒙る (bhoktā)。
- 二、解脱の不退転境地。人我は現世において解脱の境地に到達する (mukta)。
- 三、無尽至福参加。人我は現世を離れ、梵界に到達した後、梵の至福を直視し、その栄光に参じながら永劫に互って梵を礼讃し奉る (nitya)。

永遠来劫における人我の自他意識の有無の問題は、全人類にとって極めて重要であり、我々も避けて通れない二者択一的な事実となるであろう。現世において完全な解脱と栄福を切望しながら善と信愛 (bhakti) で満ちた人生を歩み終えた人我は、梵と明合し、その至福と溢慶に参与し、永遠来劫を通じて会得した栄光の境地を失う事がないと両大師は論撰する。これを機に、現世における人我の本性と無尽来劫における解脱我の天然自性の同一、存続とその活現について、ラーマヌジャの本音を斯様な文をもって略述する。

「人我の本然之性の一要素である自他意識とその活現の全滅というものは人我の実相〔本性、正体〕の絶滅・絶無化であって、非意識的な無機物質への変成を意味する。人我の自内性を構成する絶対不可欠な要素なる自己意識の全面的な壊滅は、完全解脱と称せられる自己完成・自己の無限発展・至福の会得や無尽悟智の享受と全く無縁の境界であって、真の解脱や永遠の栄福の確得と両立不可能な世界である。しかし、死を出発点とする自己の全面的な壊滅とその意識の絶無化なる解脱を人生の最高目的および至福の極地として掲げ、全身全霊を尽しながら終生、誠実に身心を挙して自己の全滅を追求する人がこの世にいたのであるか……即ち、自我の全滅を無上の善美と至高の栄福として仰ぎ、追い掛けていく人がハタシているのであるか……それとも、永遠に尽きる事がない意識に満ちた自他至福の願望と万人靈我の解脱の性向は空中楼阁や夢中空華のような空前絶後であろうか……人我の無化は、人生の無上目的であるならば、因果縁起法、業報原理や輪廻転生の道理も文字通りの繆見であって詭弁でもある」⁽⁶⁾。

それから、梵の活現成としての宇宙万有の開闢、生成化育と閉闢の経過、更に、人我の存在様態とその経歴を四劫に大別して概略する⁽⁷⁾。

- 一、宇宙開闢以前の静寂不動の玄劫期・空劫期 (pralaya)。人我は非実有の状態に似通った幽玄で極微および未開で無名の単子として存在する。
- 二、宇宙機後の万我物事象の出現期間という成劫期 (pralaya⁻prapañca)。世界万物の創生化育と共に万我も至極細微の状態から興起され、前生の業に適した身体と結合する。そして、この世で迷悟しながら解脱を目指す。
- 三、宇宙万有の壊劫期・還劫期 (prapañca⁻pralaya)。万我は万物事象と共に宇宙機前に酷似した静寂状態へ還帰する。この時点において、万我万物は分離し、一切の身体を離れ、極めて微細な様態に帰し

た後、梵の妙身の一相として存続する。

四、空劫期 (pralaya)。宇宙万有は壊滅の頂点に達した後、梵の無上幽玄で全面的に不活緩慢の身として次の成劫期の開始を待つ。

以上、紹介したヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタの人我観を次のような文をもって括約して置く。人我とは、物質、肉体、無自性や無相の實在、生氣、生命や感覚でなければ、無辺際で単一純然たる慧知と自他意識自体でもなく、知識、自他意識および自他解脱への性向を天然性質の不可欠な要素とし、梵に永遠に依存しながら自業の善悪と正邪に応じた自由と歓喜や苦悩を享受する不生不滅で極微の人格的な靈であって作者である。

三、梵の神秘的な性格を論ずる「妙格説」

ヴィシスタードヴァイタによると、梵は、無性無徳差で唯一の純然たる實在 (*Nirguna Brahman*, *Deus apersonalis*) ではなく、無尽で超絶の万徳と性能を本然性質とし、善美で絶妙の極まりない性格を具わっている存在者 (*Saguna Brahman*, *Deus personalis*) である。

シャンカラ (788~820) を太祖とする絶対不二一元論は、一切存在とその世界を次のように説示する⁽⁸⁾。一切劫界において、絶対超越で無性無徳差の上位梵⁽⁹⁾、万有千化とその最高有である下位の梵を識別する事が出来る。下位梵は現象界に属する以上、不変で永遠の實體者ではなく、虚実的で非実有であって、真の梵ではない。それに対して、上位の梵は、無常で虚構的な万我物事象の世界を完全に隔絶し、無性無徳差を「本然の性質」とする唯一で生一本の實在自体である。この梵は、無常で利他的な宇宙を超絶しながら、一切有との縁も断絶しているため、その自然面目も当然、完全に非物質的で非現象的な世界である。更に、上位梵は、無比で卓越した性質、形態や静動等のような徳の能所を中身とする位格神 (*Deus personalis*) でもない。この梵の無辺際智、無尽慶福、永遠で無礙の命や無上の善美等は、智福や歓喜という異なった本性や本質を具有する梵の属性や徳力ではなく、慧智がそのままに栄福であって上位梵であり、慶福がそのままに永遠無尽の生命であって絶美の實在そのモノである。即ち、上位梵とは、性質徳差の全くない単一で同然たる生一本の實在自体である。ところが、シャンカラ風の世界を構成する低次梵と万我物事象の無自性無徳差、平等無差別、虚実的な仮現、非實在性や同時有無の諸見、まして、高次梵の虚偽的な活現成、梵の性質徳力の非實在性、全面隔絶的な一元性と唯一の實在性という定説は、ヴィシスタードヴァイタによって論駁され、一貫して舛馳^{せんち}の謬説として斥けられる。以下、その反論の要旨を簡単に紹介する⁽¹⁰⁾。

まず、低次梵を内抱する宇宙が虚実的な化現、幻覚や非実有であるのに対して、高次梵のみが唯一無二の實在であるという教理をヴェーダーンタ学派の聖典、その古伝論釈書および万代万人の存在的な経験の土台とする正悟に照らして観ると、シャンカラ的な立場は著しく合理性を欠く非現実的な見解であるとわかる。何故かと言うと、万我を初め、その思惟、苦楽、善悪、社会、万物事象、因縁とその果や不二一元論自体も当然単なる幻覚、虚実的な現象又は虚無であると認めざるを得ない。しかし、絶対不

二一元論者が描くセカイが実存在しない。なぜかと言うと、虚実の化現、虚と実や有と無は一体一如として存在し得ないからである。一方、ヴィシスタードヴァイタが主張するように、例え、「虚実的な現象」という文句を譬喩的に解釈し、世界万有が流転変易すると理解しても、無常なる万物の実在性が勿論の事、そこに活現成する有常界の面目も必然的に認めないと、その語句自体も無意味な空言となる。

次に、上位梵が自らの世界において一切の性質徳力、体相用や分別認識等を有しない純粹な生一本の実在であるという定理も錯慮による虚空華（実在しないモノゴトを実有と見誤る事）である。何故かと言うと、衆生の感知、直観や大悟でさえ、全く特徴のない存在を把握したり、その本来面目の真相を究尽したりする事は出来ないからである。それから、性質徳差の全くない実在とは、「全く中身の無い有」と観る可きであるが、「中身のないこと」と「実存すること」とは同時両立や共存の不可能であって矛盾する概念の組み合わせに過ぎない。このような梵が空前絶後であり、虚名である。

又、一切の世界を全面的に超越し、万我物事象と全く縁のない独立無伴の実在としての梵は、この宇宙の性質と万徳の外であるために現世的な悟知に一切関わらない、完全に隔絶した存在である。

更に、上位梵は、性質徳差が一切なく、世界万物の無常流転を完全に全面的に隔絶する純粹存在であると同時に、無分別知（意識）自体、去来永劫に互る無尽無礙の慶福と自由自在や不生不滅の生命自体でもあるという見解も繆りである。宇宙の非実在性や同時虚実性、上位梵の唯一実在性、その無性質無徳差および全面隔絶性について既に言及したが、今度は、絶対不二一元論が唱道する梵の「生一本」性と其の把握について、一点二点を指摘しておく。要するに、非実体であって無常で無自性の虚実なる人我は、完全超越的で純粹生一本の存在たる梵を如何にして把握し、理解し得るのであろうか。先ず、宇宙万有を虚構的な現象や非実在と認める以上、その仲間である万我は、一切劫界を全面的に隔絶する高次梵、その有無や存在の様態についての真知を得る実質的な根拠が全くない（*sine fundamento in re*）。更に、宇宙万物を完全に超越し、性質徳差を全く具有しない上位梵が如何にして無限無瑕の慧智・善美・慶福そのモノであり得るのか。又、智福と善美等の徳が異名同体であるなら、識別の根拠とその中身も荒唐無稽であって空語に過ぎない。

最後に、一切世界の我物事象とその千差万変の非実在性、同時虚実性や幻覺的な泡影性の由来を唯一の純粹存在たる高次梵の虚偽的な活現にみる教説も健全な論辯に耐る事は出来ない。厳密に言えば、この説によると、本来実存しない又は、虚実的なソシザイたる無明に因って蔽虧された宇宙万有は梵の本然たる無自性無徳差の詐善的な現成の虚妄・虚構であるということになる。今まで迴避して来たが、絶対不二一元論の梵我物関係において不可解な馱氣力（*māyā*）の謎めいた活現による万我物の錯繆的な無明（*avidyā*）が根本的かつ不可避的な役割を演じている事は周和の事実である。このマヤー・アヴィデア論の詳説が本題外であって別の折に譲るが、現時点では、取り敢えず、この論ほど猛烈に謬辱的な反論に悩まされたものはない上に、矛盾だらけの説としてヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタによって全面的に否認されている⁽⁴⁾。一方、ヴィシスタードヴァイタが唱道する梵我物の関係における梵の根本的な地位、特に梵の「性格観」を以下のようにまとめる事が出来る。

一、梵と一切の世界は本来、峻別不離の世界であって、実存する世界である。

一、梵は、永遠を通じて、無限無尽で完全無欠の徳力を本然性質とする不生不滅の「妙格神」である。

一、梵の「妙格」とは、梵を梵とする徳力とその機能（活現成）の性格の絶対的な唯一無二性である。換言すれば、梵と万我物事象は、徳力とその機能の実質と存在性を分ち合う（実質の類似性が認められる）が、梵の存在、梵の本然徳力の性格とその性能は唯一無比である。更に、観点を換えて言うと、梵の「性格」は、人我を人我とあらしむる「人格」(personalitas humana) のようなものでなければ、神我を神我とあらしむる「神格」(personalitas divina) のようなものでもなく、一切の位格（神格、人格等）を永遠で完全に遍徹しながら超絶する性格である。即ち、万代万人は、天然の性において、お互いに似ているので、「人類」を成し、万神の本来自性においても神格の相似があるので「神祇」であるが、梵の本然自性に類似するモノがないため、梵の本然自性を「妙性」や「妙格」（言い換れば、神格を無限に絶する聖妙極まりない位格）と称ずる。

四、梵の超徹的な靈質を論ずる「大魂魄説」

ヴィシスタードヴァイタの聖典、註釈書や論著によると、匹儔なき妙格神たる梵は、精神を天然之性とする万我および非情非精神を天然自性とする物質世界の絶対で遍徹的な靈我 (*Purusottama, Paramātmān, Śarīrin, Anima absoluta et universalis*) である。

一切劫界の我物事象は本然の性質とその実在において梵を必然的な要因と依拠とする。この定理が人我と人体の依存関係の普遍的な経験を基範にした論理に由来する⁽¹²⁾。ヴィシスタードヴァイタが論辯する無上の靈我、即ち遍徹的な大魂魄としての梵と、尽十方界の万我物事象の依存関係においては、斯くの如き五要層は判別され得る⁽¹³⁾。

第一に、梵は、一切の我物事象とその多様な関係を隙間なく浸徹しながら、悉有各々を然る可き性質と徳力で充満し活性化 (*animatio, ensouling*) する最高無比の靈我である。この大命我こそ、万我物事象に内住する個我の一種ではなく、一切劫界の極大極微の全存在をありのままにあらしめながら活現せられ、永遠無碍にして、靈妙極まりない大魂魄（「魂」は、一切精神のはたらきをせしめながら、それらを司る靈力である一方、「魄」は、万有の物質とそのはたらきを養活しながら司る力）である。総じて「魂魄」や「営魄」というのである。梵たるこの大靈我は、独占徳力として、三種の遍徹機能を本然自性の根本とする。

一、宇宙開闢以前の幽玄で大寂緩慢の様態に住じた極微で精妙な万我を興起し、極めて微細な原質量の化育と発展をせしめ、梵身の隠然たる性質とその道理の一現なる業法に遵じて、各我を適した物質量と結合させる創造的な働きである。

一、万世千界の我物事象とその活動を養成することである。

一、宇宙万物の崩壊後、空劫中に、一切の存在を隠然たる胎藏に受容し、大寂無対で極微の梵身として保存せしめる梵の不可思議な神通力（自存自立力）である。

従って、梵は、一切の我物事象をあらゆる様態において沁徹しながら無間断に養活する太極の大魂魄として理解されている。

第二に、梵は、本然実相の秘蔵界においてのみ無量の永劫を通じて不変同一にして自立自存し、自ら

の心身全相を完全に自覚しながら無尽無量の徳力を自然性質として具有する無上無比の持主 (^{Sesi-}Dominus) である。一方、梵の蹟在実相たる宇宙万物は、自然の性質とその徳力において、一切の劫を通じて梵に依存する世界であって、梵の所有 (^{sesa,}propertas) でもある。換言すれば、一切存在を成す梵我物事象が、峻別一如で相即不離の世界であるが、この世界の潜在実相・大極の心・本然自内性や隠然たる秘蔵界と称ぜられる梵だけは、自らの活現成身 (^{śarira,}corp^{us} animatum) であって蹟在実相でもある一切劫界の我物事象を沁徹し活性化 (^{śaririn,}Anima incorporata) しながら、永遠にそれらを超絶する唯一無上の靈我 (Paramātman, Ani^{ma} transcendentalis) である。斯くして、梵を超徹的な大魂魄 (Anima immanen^{to-}transcendentalis) と呼ぶ。

第三に、梵のみが宇宙万有を自由な慈愛をもって恣に絶えずあらしめながら盈濡する究極の存養主 (^{Ādhāra,}Animator) である。

第四に、梵は、一切世界を慈養し存続せしめるだけではなく、万我物事象とその万変千化の必然不可欠で太極の拠り処であって、一切有の全実相界を統理する内制我 (Niyantā, Impe^{rator} internus) である。

第五に、永遠の不変同一性、自存自立性と自由自在性等の神聖極まりない徳力を具えている妙格神たる梵は、一切劫を通じて万有万象を彌綸しながら沁徹し、養濡しながら無間断に活性化せしめる無礙で万能の主であるだけではなく、三世尽十方の万我物事象とその徳力を時々刻々に透脱しながら永遠に超越する匹儔なき命我 (Anima absolutamen^{te} transcendentalis) でもある。しかし、梵と宇宙万物の依存関係における梵の超絶性は、人間界における自由人と奴隷、利益を得る主と搾取されて損を蒙る弱者や国家元首と国民のような上下関係における差別的な優劣ではない。実は、梵なしに宇宙万物の一塵一刻さえ存在し得ない。梵が実存し、活現する事に因って尽十方の万世千界が在る。この最善で絶愛の梵は、完全な自由と責任をもって、一切を創造し、化育発展、老化と退化等をせしめ、自内性法の一現である普遍的な因果縁起法と各自の自由を尊重しながら、万我物を解脱へ導くとラーマヌジャの時代から一貫して、ヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタが教えている。

以下、ラーマヌジャによって著された『ヴェーダーンタ聖典の論釈大全』(THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE ŚRĪBHĀṢYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA) から、梵の性質、特に神秘的な位格性と超徹的な靈質に関する重要な文を撰著しておく。

『一切の存在は、梵を(太極の)本我とする〔Chāndogya Upaniṣad, VI.8.7〕。…一切有の内存在者である梵は、生成化育する万世万有の制御主(通総者)でありながら、万有を沁徹する大靈我(大魂魄)である〔Taittirīya Aranyaka, II.21〕。…大地の中に在る存在は、大地の内制主であるにも拘らず、大地は彼を識らない。しかし、それにも拘らず、大地は、彼の身体であって、彼は大地に遍在する内制我である。そして、彼こそ、汝(と万物)に遍在する最高の統理者であって、永遠不死の大靈我である〔Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad, III.7.3〕。…物質世界の諸原理等の中に活動する者も、一切の物質の内制主であるにも拘らず、物質界は彼を識らない。しかし、物質も、彼の身体(の一層)であって、彼は、あらゆる物質界の太極我である〔Subāla Upaniṣad, VII.1〕。…万我の中に在る者が、万我の内制主であるにも拘らず、万我は彼を知らない。しかし、万我も、彼の身体(の妙相)であって、彼は万我の(隠然たる)内制我である。彼こそ、汝と万我を沁徹する本来の統理主であって、永遠不滅の大宮魂である〔Mādyandina Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad, III.7.3-22〕。…水、火、太陽、星月や宇宙の諸道理等に遍在する者が、宇宙万有の内制者であるにも拘らず、万有

は彼を識らない。しかし、彼こそ宇宙万有を浸徹しながら通絶する大靈我である。この靈我也又、一切の罪惡と欠瑕を隔絶した存在であって、絶妙極まりない神格を本有する無上の君臨主である。彼は、唯一無二の神、ナーラーヤナである〔*Subāla Upaniṣad, VII.1*〕。…彼（梵）は、一切生命の御いのちである。大靈我たる彼は、吾が心の中にも存在する。彼こそ、一切の世界を沁徹しながら超絶する靈我である〔*Chāndogya Upaniṣad, III.14.3-4*〕。…「一切の生命は、梵の身体（の一層）である」という語はラーマヌジャによって、次のように解釈されている。「梵は、一切世界の万我物事象の生命、形態とその存在を養活する主であって維持者である。一切の生命は、梵を太極の源泉とし、彼の御旨（梵法、普遍的な秩序）を絶え間なく実現するだけではなく、彼に対して、最終的な責任がある。結局のところ、宇宙生命の全ては、梵身の真相であって、その多種多様な活現成の様態である。…そして、一切存在の匹儔なき大魂魄である梵も又、宇宙万有を自己顕現の形態とし、自らの活動の場とする。この梵こそ、我々の信仰と礼拝の対象である」〔*THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE ŚRĪBHĀṢYA OF R. vol. II, pp.6,9,10*〕⁽¹⁴⁾。

五、梵身の性質を論ずる「活現成身説」

ヴィシスタードヴァイタ学派によると、一切の我物事象は、絶美の性格と靈妙極まりない無限の徳力を本然性質とする梵の隠現的な活現成身（*śarīra, corpus animatum*）^{じょう}である。ラーマヌジャは梵身の世界を斯くの如く叙述する。

『梵はこう念じた、「吾れ、多者多物として現成しようか」〔*Taittiriya Upaniṣad, II. 6.1, Chāndogya Upaniṣad IV, 2.3*〕。…「彼は心の奥に念じた後、自らの妙身に潜在していた原素から万物の生成をせしめ、自身実相界の一面を顕現したのである」〔*Manu-smṛti, I.8*〕。…この梵こそ、自由自在であって、有常と無常の万物と素晴らしい徳力を自らの身体とする。よって、梵と無縁で、又は梵を太極本我として有しない我物事象が一つも存在し得ない〔*THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE ŚRĪBHĀṢYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, p.178*〕。…有情と非情、精神と非精神を天然性質とする世界、不壊不滅や壊滅変化を稟性とする万有事象、更に、因果縁起等の理法を構成要素とする万劫の我物事象は、永遠の遍在主たる梵の活現成身であって、この梵を本然自内性・究極の本我とするものである〔*THE VEDĀNTASŪTRAS WITH... vol. I, p.152*〕。…「宇宙開闢以前（^{げんこう}玄劫期・空劫期）の全面的な大寂緩慢に住じた極微の無機原水（*brahmānda*）から生成化育した山水草木と多種多様な万物も絶対超徹神たるヴィシュヌの活現身である。ヴィシュヌ神こそ、尽十方界の我物事象の無上靈我（大魂魄）である」〔*Vishnu Purāna, II, 12.38*〕。…「時と場を問わずに存在する形而上下界の万我物事象は、そのまま、絶対主の現成身である」〔*Vishnu Purāna, I, 22.86*〕。…「大地の中に在る者は、大地の内制主であるにも拘らず、大地は彼（梵）を識らない。しかし、それにも拘らず、大地は彼の現成身であって、彼は大地の遍在的な内制我である。そして、彼こそ、汝（と万物）に遍在する統治者であって、永遠不死の大靈我である。…四方八方の水、光、火、天界、日月辰、生氣、空間（原質量の三徳なる）純質、激質と闇質、更に、生命、自他意識、思慮、大悟、言語、眼耳等、皮肉骨髓、種子、万我、一切劫界の全ては彼の身である」〔*Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad, III, 7.3*以下〕という文は、梵が一切の我物事象の究極靈我であると同時に、万我万物も、梵の活現成身であることを明示する〔*THE VEDĀNTASŪTRAS WITH... vol. II, pp. 233-4*〕。…「天に輝く光の世界は、梵の顕然実相の一面である。天空自体が彼の胴体であり、日月が彼の両眼であり、四方八

方が彼の耳であり、空気と風が彼の息であり、地上の万物が彼の内臓であり、海水と山水が彼の膀胱であり、大地が彼の両足である。諸聖典が彼の神言の記録である。彼こそ、真に宇宙万有の絶対的な大魂魄である」〔*Mundaka Upani-*。 (要するに) 一切世界を沁徹し、養濡しながら超越する靈我だけは、このような広大無辺の身体を有する。…この梵こそ、一切世界の空劫期、成劫期と壞劫期を通じて、精神を天然本質とする万我、非精神を稟質とする万物とその万徳形態を、自らの妙身として有する。そして、万我万物の天然自性が梵身の大家緩慢(空劫期)においても、虚無化する事もなければ融滅することもない。梵身の大家緩慢という様態こそ、一切有の原質量因である。…無上の位格者(太極靈我)は、宇宙存在のあらゆる段階において、有情精神を本質とする万我と非情非精神を稟質とする万物を自らの身体として有する。万世千界とその我物事象は、梵身実相の顕在界であって、その活現成の一面に過ぎない〕〔*THE VEDĀNTASŪTRAS WITH...*, vol. I, pp.163, 174, 176〕。…「三世界(一切の過去、現在と未来に実在する世界)の我物事象は、壞劫期の閑時に吾が身の大家で無対の様態に還帰し、全面的な不活緩慢の状態に住する(空劫期)。そして、新成劫の初めに、吾れ、自ら再度、吾が身の極微原質蔵に万我胚(命我胚)を据え、新宇宙開闢の準備が始まる。吾れ、一切有を創造し、悉有万化を活性化しながらその存在と生成化育等を常に維持する者である」〔*Bhagavad Gita*, VII, 4.5; IX, 7-8, 10; XIII, 19; XIV, 3.】⁽¹⁵⁾

先ほど、ラーマヌジャの表現を借りて紹介したヴィシスタードヴァイタの宇宙観、厳密に言えば梵身実相の世界、特に、梵の顕然たる活現成身としての宇宙万物を正しく理解するために、本学派の「身体」観、即ち、「身体」の根本的な性質とその真相に正しく通徹する事は不可欠である。何故かと言うと、ヴィシスタードヴァイタの身体観、そして、その結果として宇宙観も、風俗や自然科学が用いる意味での「身体」の概念とかなり異なる内容を有するものである。従って、ラーマヌジャとヴェーシカタナータによると、身体とは、原子、極微個体、物質、無機死物、肉体、上記の混合体やその属性、又は、徳力でもなく、

『知覚と意識を本然性質とする靈我に全面的に依存し⁽¹⁶⁾、その靈我の栄福を追求する為に恣に使用され、様々な目標と究極目的の達成にも確実に役立ち、更に、何時何所でもその靈我によって完全に制御され、通和され、統理されながら⁽¹⁷⁾当靈我との一体をなし、離別や死別まで⁽¹⁸⁾この靈我によって存養(即ち、その存在が維持され、養活)され得る精神的や物質的な実有である』⁽¹⁹⁾。

ヴィシスタードヴァイタは、梵身の顕然たる世界における靈我と物質の関係、特に「身体」の特徴とその役割を、一切存在の本然秘蔵界であって大魂魄でもある梵、およびその自然身の分身である万我物事象界との関係にまで敷衍しながら、梵我物関係の真髓を類比的に論究する。この考察の筋道を辿ってみると、梵身の活現成の層たる万我物事象界の真面目とその天然性質の基格をラーマヌジャとヴェーシカタナータの文脈主旨を保ったまま、ところどころに推衍しながら下記の如く撰述する。即ち、梵の「身体」とは、

『一切の存在を沁徹しながら養濡するヴィシュヌ神、万能の創造主たるナーラーヤナ神や無尽栄福の主たるイシヴァラ神等と称せられる梵に、全面的に依存しながら梵の目的達成の為に自由恣に用

いられ、その永福と栄光を確実にもたらし、あらゆる時と場において、梵によって完全無礙cfに制御されながら通総され、一切劫を通じて存養される万我物事象とその徳力の世界である。従って、この梵こそ、一切劫界とその万有万徳の自然の本末であるため、無上の靈我や普遍大魂魄と呼ばれる。このようにして、知覚と意識を天然性質とする万我(cetana, entia spiritualia) および、無知の物質を稟質とする万物徳力(jada, entia materiales) は、一つ残らず、絶美の妙格神たる梵の身体を構成する要素である』⁽²⁰⁾。

以上は、ヴィシスタードヴァイタの身体観と梵身論の撰述である。ここからは、梵の活現成身としての一切劫界の万我物と万徳千化の把握の心髓を下記の3項目にまとめ、解釈する⁽²¹⁾。

一、一切世界の万我物とその万徳千化はあらゆる時、場所、実存の形態や意識の様態において、その儘、梵身の形而上下的な活現成の層である。換言すれば、無量の過劫、現劫と来劫の一切存在は、在るが儘ままに、梵の本然実相界の根本要素である不可思議な身体の顕然たる真相でありながら、その本然秘蔵界の時空的で我物事象的な露頭でもある。宇宙万物は更に、梵身実相界とその存在の多種多様な具現化と形態化であるだけではなく、梵自体の本然性質とその無限徳力の活現の結果と時場であって、梵身の隠然たる実相、即ち、本来全面的に静寂不動の状態に住じる極微の万我胚(brahmānda, 金卵, 梵卵)と原始物質(proto-prakṛti, 極微原質量界)の壮大化であって、多様に変化する世界でもある。しかし、梵と宇宙万有は、同一でなければ同等の存在でもない。梵は、隠然たる極密の一切心(二切有の本然秘蔵界、二切存在の本然の性)として、無尽永劫を通じて、あらゆる宇宙とその万我物事象を隙間なく沁徹しんしながら超越する靈我である。一方、一切の存在が、梵の本然絶美で極まりない秘蔵界の全相を完全に顕現したり、梵身の潜在的な徳力の全てを使用し尽したりする事は、永遠に不可能である。更に、この梵は、一切世界とその全存在の本末的な大魂魄⁽²²⁾であるだけではなく、無尽無碍げにして、恣に自らの性質とその善美徳力の根本を露現(mahāvibhūti, manifestatio naturae essentials)し、無量劫界の我物事象とその万徳千化として自由に活現成しながら、万我の真福をはかる慈愛の救世主でもある。梵の本然活現成の中には、主として次の二層が識別され得る。一つは、分別知をもって把握出来る現劫の万有千化の世界(bhāvibhūti, 現世的な活現成)であって、梵の栄光の3分の1を示現する相である。も一つは、現世的な悟知で僅かしか垣間見る事が出来ない永遠卓越的な精神の世界(nityavibhūti, 超現世的な活現成)である。この世界は、梵の栄光の3分の2を示現すると言われている。よって、現劫界の万有千化は、梵の本然実相界の一種の様態であって、一現に過ぎない。

二、尽十方界の我物事は、一切劫とその開闢化育のあらゆる次元と経歴の段階において梵の活現成身である。周知の如く、梵身全実相の顕然たる世界は、活現成身として、理知的な精神を天然之性とする靈我(神我と人我)、感情を稟性とする多種の命我(動物)、多小の感覚を本有とする個我(植物)および無機物質を本性とする個物から構成されている。梵の活現成身の絶妙相たる悟知的な靈我群は、天然性質において、梵に全面的に依存し、不生不滅の生命を無間断に養濡されながら、梵法の一種である業法に適した身体と調和的な一体を成し、梵身の顕然たる実相界の因縁業法に遵じて、自らの後世と実存の形態を自由に作成しながら、自分の永福を追求する。更に、動物は、梵身活現成の異態でありながら、神我や人我の輪廻転生の邪悪道であってその修道でもある。そして、無機物質も、梵法に順従して膨縮ぼく麤細しゆくそさいと様々な変化の運命を辿りながら、万我の迷悟と輪廻転生の六道において前生業報に適した身体の材料としての役割も果している。しかしながら、現劫万界の我物事象は、梵の活現成身であるにも

拘ず、既に言及したように、梵の本然性質とその無限徳力の顕密界や梵身の隠然たる実相の能態全てを永遠に開現し尽せない。現劫の宇宙万有は、梵身の開翦的な実存経歴の中で、一時的な過程であって、梵界の無極絶美境の活現成の一位に過ないものである。梵身の実存とその活現成の経歴においても、無量の劫波が流逝し転変するが、便宜上で、三劫の過渡期（空劫→成劫→還劫）を一つの「大劫期」と観ることが出来る。先の章、「人我論の概要」の中に、人我を中心とした宇宙の開闢、化育と閉闢の経歴過程を簡単に紹介して置いたが、今度は、万我物事象とその徳力万化を、梵身の顕密的な生命体として扱い、その存在の経歴についてより精詳な説明を加えたい。

玄劫期・空劫期 (*pralaya, inertia* / *pre-cosmogonia*)。この時期は、一切宇宙の開闢以前に実存していた梵身全界の極めて絶妙で完全に大寂の相、又は、現劫の天地万有が無対無分別で幽玄静寂の様態に住じた時の事を言う。一切有の初発以前（玄劫）や現世世界の太初以前（空劫）に無尽の過去より既存する梵は、不可解不可得で匹儔なき万徳を本然性質として有しながら、一切の理知と迷悟を絶する大慶栄福を無間断で「恣に憫んでおられると言うより他はない。そして、精神的な悟知を天然実相（真面目）とする神我、祇我と人我は、非実在に接近した幽玄極微で無名未開の単子の如く、梵身実相界の一層として実存する。諸霊我は、玄（空）劫においても、梵に全面的に依存し、絶え間なく養生されながら、熟睡を遙かに越える全面的な静寂緩慢の状態に住ずる。この時、万我は、原質量と一切無縁で、梵身の隠然たる実相の精神的な極密の層（梵卵・金卵）としてのみ実存する。更に、現世万我の龜身の材料となる可く物質も、非実在に近い、極端に縮収した幽玄精妙な原質 (*prakṛti, proto-materia*) として実存する。一切龜身の太極素材でもあるこの原質は、梵の実力に全面的に依存し、未開無差別、静寂不動で極微の状態に住しながら、梵身の極微妙層として絶えず養濡されている。よって、当劫期は、梵界の永存において一時一位であって、梵身の存在経歴においても、全面的に隠潜した実存の様態である。

成劫期 (*pralaya→prapañca, śam-sara, sarga, cosmogonia*)。成劫とは、現存する一切世界の万我物事象とその混然たる諸関係の開闢、活性化、多種多様な活現成と発展の時である。この期の太初に、梵は、自らの神心において、「吾れ、多者多物として活現成しよう」(Taittiriya Upaniṣd, II, 6.1. Chāndogya Upaniṣad, IV, 2.3.)⁽²³⁾と意思して、宇宙開闢の運命を勅断したのである。即座、梵は、全く自由で無償の博愛をもって、神明の神力を応用して、幽寂緩慢の状態に住じた万我胚を活性化しながら、前世の自業を因縁に、悉くの霊我に存在実態を稟け、適した身体と結合させる。それと同時に、全面的に不活不動で極微精妙な原質量を刺激し、本来そこに潜伏していた稟性、その万徳と能力を開済しながら、今日までその生成化育、膨縮増減等の万変千化を存養せしめる。

還劫期・壊劫期 (*prapañca→pralaya, decosmizatio universalis*)。本過程は、梵意を本末終始としながら現存する宇宙万物の開闢、生死と化育等の秩序が徐々に崩れ、梵の顕然たる活現成身としての尽十方界も畢竟、閉闢される時期を言う。この劫期中に、一切世界の万我物事象の顕隠、成、進退、生死と膨縮等の万化経歴の平衡状態が崩れ、縮収、分離、死没、退化と破壊の傾向が主導権を握り、優勢力として一切を統轄する。結局、万我万物は、機前に酷似した極密幽玄の状態に還帰し、梵身の隠然たる真相として実存し続けるであろう。本劫と前劫の二過程は、順番で成立し変成するものではなく、梵の本然理法に循ずる天地万物の龜大化と精妙化、開闢と閉闢、生成的な化育と死滅的な転変、多様化と一如化等としての梵身存在の隠現的な面であって、その潜徳露顕の道場である。この二劫は、更に、梵の心身永存とその活動の根本次元であって、梵の絶妙極まりない生命力の活現成の形態でありながら峻別不離で複雑に絡み合う自然の経

過である。

空劫期 (*pralaya, inertia post-cosmogonica*)。この劫期は、梵身の顕在実相たる現宇宙とその万有差異が消滅し、天地開闢以前のような、極めて幽玄で静寂な状態に還元した後、不可見で全面的に不活無対の妙身として次の成劫開始までの休息期間である。

三、一切世界の我物事象とその関係は、梵身の顕隠的な実相の多様多面的な活現成である故に、梵の栄光、不可得の慧智と無償の博愛の現前成就でもある。同時に、この宇宙こそ、梵の顕密宝蔵界の無極絶美、本然の性質徳力の無尽卓越とその生命機能の普遍性を窺わせる「開華一閃」のような存在である。それに、梵身の顕晦真相に属しない我物事象、徳力や関係が一つもなければ、梵法に順従せず、その神通力の活現から一寸一刻でも離れ得る一笑一転が実存しない。

六. 梵我物の性質的な関係を論ずる「異性同質説」

梵我物は、各自の本然実相界において、一切劫を通じて、本来自内性を異にししながら、その実質たる生命とその本徳を同とする「異性同質的」な世界であるという見解はヴィシスタードヴァイタの定説である。本学派の太祖であるラーマヌジヤは、「ヴェーダーンタ聖典の論釈大全」(THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA) という大作の中で、梵我物事象の関係実相を様々な見地から詳細に論辯する。本題に入る前に先ず、言及した論釈書の内から最適と観ずる論考を選び、著者の主旨を常に考慮しながら、その意味をより明確に表わす為、必要に応じて文脈を小々敷衍して、下記の如く紹介する。

『一切有の超絶我たる梵は、高我群の中で最高の実在者である。梵は、至高の靈我であって、万物事象の我の本我でもある。この本我は、一切我の内に不変確立した地位を占めているが、形色等のような固定的や現象的な属性ではない。この超絶我は、生滅する事がなければ、変成や腐廢等もする事なく、万劫千界を通じて絶対者として実存する。この我は、一切有に隙間なく遍満し、万世千界もこの靈我に内在するから、聖哲によって、ヴァスデヴァ (*Vasudeva, 宇宙遍在主*) と称せられる。梵たるこのヴァスデヴァは、無上至高、去来無尽、不生不滅、不腐不壞、不増不減、永遠不易の存在であって、一切の罪惡と欠瑕を隔絶しながら、無限の徳力と無尽の性能を本然性質とする命我である。梵だけは、そのような神徳と能力を本有する。更に、この梵は、顕然たる世界と隠然たる世界を本然実相界の相即不離の構成要素とする。そして又、梵の顕在実相界は、精神を天然之性とする万我および非精神を稟性とする物質から成り立つ』〔*Vishnu Purāna, I, 2, 10-14*〕。…『あらゆる世界の万我物事象は、無上の靈我たる梵に還帰し、梵身の懷に受け入れられるであろう。(何故かと言うと) この靈我は、無償の慈愛をもって、一切の世界とその存在を維持しながら、各々の天然の性に循じて、万有を養成する超絶の主である。この梵こそ、ヴェーダとヴェーダーンタの諸聖典の中にヴィシュヌ (*彌論者* 遍満天) と呼ばれている』〔*ibidem, VI, 4, 39-40*〕。…『梵の本然実相界には、根本的に二つの真相 (面・次元・真面目) がある。第一は、一切劫界とその万有事象を永遠に超越する非物質的で本来不可得の秘蔵界 (絶対的な形而上界・一切劫界の本然無極の自内性) である。第二は、梵身の顕密実相を構成する万我物事象の世界 (梵身を成す形而上下界・一切劫界の万有とその変化)。前界は、永遠の自存自立と不

生不滅を本然自性とする世界であるのに対して、後界は、永遠の依存と生死万化を天然之性とする世界である。両世界は、本然自内性において永遠に異なると同時に、両界の実質たる存在（實在性・生命）の面において不離一如のものである。不生不滅にして永遠自立の者が梵と称せられ、依立て起滅するものが宇宙万物である』（*ibidem*, I, 22, 55-57）。…『梵の力は、絶対無礙の活現力であるのに対して、万我の活動とその果報および物質の万力は梵力に全面的に依存する。梵力は、一切を通じて活動するが悪報と無縁のものであるのに対して、万我の活動は必ず善悪の果報を生ずる』（*ibidem*, VI, 7, 61-63 概略）。…『正覚者よ。絶対の主たるこの梵は、一切劫界の物質的な太極、天地初発の大原理、万有個性化の大原理、宇宙万物の生成化育、その形態、属性、徳力や善美を遙かに超越する存在である。万我万物の究極生命力でもあるこの主は、一切有のあらゆる限界、罣礙、繫縛、欠瑕や邪悪等を完全に絶すると同時に絶えず宇宙万物を沁徹する永遠の大靈我である。更に、この主は、善美極まりない性質徳力を本然自内性とする。彼は、万能自力のほんの僅かな力を用いて、宇宙を創造し、万有の存在を維持しながら、各自の性質とその徳力を養濡する。自由自在である彼は、無碍で恣に活現しながら、最善の慶福である解脱を万我の究極目的としたのである。彼こそ、一切の栄光、慶福、存在、能力、悟知、変化と活動の無尽源泉である。最高多神を無窮に超絶しながら沁徹するこの梵は、形而上下界の絶対唯一の主であって、万我物事象の欠如、罪悪や苦悩等の気配さえない。彼は一切世界とその存在の最高で無比の主である。この主は、隠然たる秘蔵界と顕然たる世界を本然性質の相即不離で峻別一如の現実とする存在である。彼こそ、一切の悟知、善美德と力を自由恣に使用する一切の主であって、匹儔なき主である』（*ibidem*, VI, 5, 82-87）。

『真知を有する者よ。私は一切劫界とその存在の本末終始であって、私を超絶するモノは一つもない』（*Bhagavad Gita*, VII, 6）。…『自存自立者たる私は、万能自力の極僅かな力を用いて、一切の存在とその徳力を恣に維持し、養濡する』（*ibidem*, X, 42）。…『最高で無上の位格者と宇宙の万我物は異なる。彼は、不壊不滅であって永遠不変の主として三世（無限の過去、現在と無尽の未来）万界を隈なく隅々まで遍徹し、一切の我物変化を存養せしめるので超絶我と称せられる。…私は、生死するものを沁徹しながら超越するから、ヴェーダとヴェーダーンタ諸聖典の中で、匹儔なき妙格神として奉られている』（*ibidem*, XV, 17-18）⁽²⁴⁾。

以上は、梵、万我と万物事象の本然かつ根本的な同異を指摘しながら、その関係の真相を精覈に論講する『ヴェーダーンタ聖典の論釈大全』から選集した聖典の玉文である。梵我物の根本的な同異と相互関係の骨髄を説明するに当って、先ず、今まで紹介したヴィシスタードヴァイタ梵論の哲理（真諦）⁽²⁵⁾を要略する事は、本題理解の徹底化に役立つと思う。

一、梵は、一切の去来劫を通じて、自存自立しながら匹儔なき性質と徳力を本然実相とする至聖極まりない妙格神（無上無比の靈我）である。

二、梵の本然実相界は、顕在たる形而上下の三世界界と、その万我物事象を遍徹しながら無間断に養活すると同時に超越する潜在的で絶妙極まりない秘蔵界（一切の自内心）から成り立っている。「狹義の梵」とも称せられる一切存在の本然秘蔵界（一切心、無尽無極の自内性、隠然たる秘蔵界）とその身体たる万劫千界の我物事象は、本来、峻別一如（*広義の梵、梵我物の峻別一如*）の世界である。

三、一切劫界の我物事象は、梵身の本来顕晦的な実相界の活現成でありながら、その儘で、一切心の栄光、絶美と永遠の慶福の精神的かつ物質的な露頭の場である。

四、太極の大魂魄とも呼ばれるこの梵は、一切劫界を通じて、自存自立にして、無碍恣げほしいままに活現成する絶美の妙格神であるのに対して、宇宙万有は、梵身として、この一切心たる梵に全面的に依存する有限の世界である。

ヴァシスタードヴァイタ・ヴェーダンタ
梵我物峻別一如論学派によると、梵、万我と万物事象は、各々の本来実相界において、去来永劫に互って、本来の自内性を異にしなが、その実質たる存在とその徳力性能の根本を共有する世界（*Identitas in substantia naturae cum differentia ab-*
soluta in essentia naturae）である。以下は、一切を超徹する梵とその活現成身である宇宙万有の本性性質における根本的な同異について、神学的な立場に立って、本学派の定見要旨を2項目にまとめる。

一、梵と万我物事象は、一切の劫を通じて、本然之性（真性、本性、「乙」を）を異にする存在（梵我物本梵我物本
differentia absoluta
in essentia naturae）である。梵のみは、唯一無二の万徳と能力を本性の核心とする超絶神（*Deus absoluta-*
mente unicus）である。梵我物の根本的な違いは、梵、万我と物質世界の本来自内性を構成しながら決定する徳力、その活現成および本来実質（梵我物の存在と梵我物の存在と
その徳力性能）の性格である。厳密に言えば、先ず、梵は、一切の劫波を通じて、無尽無礙の悟智、慶福、自由恣意、自存自立および絶美極まりない位格的な靈質を本性性質の根本とする存在であると同時に、万我物事象、その徳力と万化の世界を沁徹しながら超絶し、絶えず養活しながら完全に超越し、万世千界の本末因でありながら自性において不変不依の大魂魄である。一方、宇宙万有は、万劫に互って、梵身の顕密実相界を一寸も離れることなく、開闔、生死、膨縮や増減等の化育転変を繰り返しながら、有限で無常の善美德と能力を天然性質とする本来依立的な実在である。逆に、一切有の無極自内心である梵だけは、永遠に無限の存在であって、本然之性において、無対で無比の命我である〔図表-2も参照〕⁽²⁶⁾。

二、梵、万我と万物事象は、本来自内性において永遠に異なるが、存在とその徳力の中身自体において本来同質的である（*identitas in substantia naturae*）。梵我物事象が本来同質的な世界であるとは、梵、万我と万物事象の各々の本性に循ずる徳力とその性能の実質は、根本的に同じでありながら、梵力の活動によって通和され、無間断に養濡されているという事である。更に、梵力の活現成に依存する三世世界の我物事象は、どんなに変化したり、幾ら流転したりすることがあっても、非存在に変成したり、絶無に転じたりする事がなければ、梵身と梵力の活現範囲を決して離れる事はない。換言すれば、梵、万我と万物事象の本末終始、性格、能力、質量、実存の様態と活動の範囲は本来異なるが、皆悉く、実存のあらゆる形態とその万徳性能において、例外なく、梵の存在力によって遍満され、絶えずに養濡されながら統理されているとヴァシスタードヴァイタは一貫して主張する。更に、自由自在で無限の生命を本有するこの梵は、一切の我物事象に、各々の天性に循じて、隙間なく隔々まで平等に稟けるものが個性ではなく、存在の能所と適切な徳力である。こうして、梵の存在と万有世界の存在が本質的に同じである（が本性的に異なる）。何故かと言うと、一切劫界の万我物事象が、梵身であって、その実相界の活現成であるからです。然らば、この存在的な一如性は、一つの宇宙的な大家族を成す親たる梵とその子等なる万我物事象、又は、不可思議な無限の命界を構成する匹儔なき大魂魄たる梵とその真実の身である万世千界が、この上もない親密で切り離す事が出来ない「生命の絆」で結ばれているという真理を示す⁽²⁷⁾。

図表～2. 梵我物事象の本然性質における根本的な相異。

梵の 本然 自性	即ち一切劫界の我物事象の本来隠然たる秘蔵界（一切心の本徳）	宇宙，即ち，一切劫界の万我物事象の顕密世界（の稟性）			
		靈		物	事
		神	我		
♡ 無尽去來劫に互って一切の依存から自由であり，自存自立的な無比の妙格神である。	永遠に実在するが，その実在と存続が梵に全面的に依拠する。	我		原物質として梵に全面的に依存するが， 我に依拠する。	現相としてしか実存しないから梵我物に全面的に依存する。
♡ 一切世界の万我物事象を隙間無く遍徹しながら，それらを超絶する純然たる靈我である。	他我物等を超越するが，梵に及べない非遍徹（絶微の）靈我である。	物質事象を超越するが，梵・神に及べない至精絶微の靈我である。	事象を越えているが，梵・神・人に及べない非情非精神的な実在である。	流転万化する悉有の様態であり非実体的な実有である。	
♡ 一切を本然身体の顕密実相として絶えず維持し，存養せられる匹儔なき大魂魄である。	♡ 梵中に遍徹せず，返って，梵によって	前世の業報として受けた自身のみを一時的に維持し得る。		常に沁徹され，梵の活現成身である。	究極的に梵，直接に他我に依って存養せられる無機実有である。
♡ 因果業報から完全に自由であり，業報の創立者である。梵身は業法に因らないが梵と永遠不離である。	業法の下に実存し，活動する。	有限の自他意識と知慧を有するが，最終解脱を獲得した際，万智も獲得出来るが，永遠に，梵に転ずる事はない。		万我は業報として享受する身体材料（質量）である。	
♡ 永遠無欠の自他意識と無辺際智を有する	天然実相の性質徳力は梵を本末因とし，永遠に梵に依存する有限界である。			無知無意識を天然性質の要素とする。	
♡ 本然実相の性質徳力は無限無尽であり，不可解且つ不可得である。	自身のみを統理するが，究極的に梵によって統理されている。			梵と万我によって統理されている。	
♡ 完全に無欠無瑕の性質徳力を本然実相とし，罪惡，誤謬や苦痛の陰影さえない。	（有限の故に）善惡等の欠如を本性とする世界である。			生滅増減等の闔闢万化に因る欠如。	
♡ 一切の万我物事象を内包する。梵の外側という世界は実在しない。	梵身の永遠の一部であり，一つの顕現であり，精神的な活現成である。			梵身の一部として一時的な顕現であって，事物的な活現成である。	
♡梵の無尽性質とその善美德等を完全に露顕したり，尽くしたりする事は永遠に不可能である。					
♡ 宇宙万有の生命万徳等の太極本源である。	梵の無極で本然の実相と匹儔無き生命の我物事象的な活現成（果位状態）である。				
♡ 一切の劫界と我物事象の靈妙窮まりない秘蔵界である。	梵の精神的且つ自覚的な現成身である。	梵の非情非精神的な現成身である。			
♡ 本然自内性は永遠不易であり，完全な自他意識を有する。	本性自体が非意識的であって，膨縮する無機の実在である。				
梵我物の 本質	梵我物事象の実質たる存在・生命が，隠現変易しながら根本的に実在・生命として有常であり，非存在・非生命に転じたり，変成したりする事は決してない！				
	梵我物の存在・生命の本然之性は異なるが，その天然実質（存在であること）は根本的に同じである【梵我物，本来異性同質也】。				

七、梵我物の親疎関係を論ずる「親疎一如説」

既に、一切劫界とその万我物事象を梵身の顕密真相と観る「活現成身説」の神学的な主旨を述べた。更に、梵、万我と事物千化が去来永劫を通じて、本然之性を異にししながら、その本質諸相を成す存在とその徳力自体を、梵の無償博愛によって、共有するととく「異性同質説」の根本定理とその神学的な趣旨も略述した。以下、梵我物の本来関係における梵と万世万有の「親密性」(saulabhya, accessibilitas)と「疎隔性」(隔絶性、又は超絶性, paratva, inaccessibilitas)とその関係を解く「親疎一如説」(inaccessibilitas in essentia cum accessibilitate in existentia naturae)の神学的な意図を略説する。

ヴィシスタードヴァイタによると、梵と宇宙万有は、心身の如く、親疎一如で峻別不離の依存関係で結ばれているが、一切世界の万我物事象を通和しながら統理する絶対的な大魂魄(超微靈我, Antarātman, scendentalis, 万有内制我, Antaryamin, Anima universalis transpenetrativa)たる梵がその関係の本末因であって究極の拠り処である⁽²⁸⁾。

先ず、梵と万我物の関係は、両者が本来、無縁で隔絶した別物であったが、実存経過のある時点で何等かの因縁によって、物質的な第三者、又は精神的な仲介機関が発生し、梵と宇宙万物を連結させた偶然の出来事(samyoga, relatio accidentalis intra realia essentialiter diversae)ではない。更に、梵我物の関係は、万我物事象が梵の内外に寄生するような依存でもない。

梵と一切劫界の我物事象との関係は、両方の本然実相における相即不離で本質的な依存関係(稟質的な常絆, aprthak-siddhi, relatio intrinseca existentialiter inseparabilis)であるという見解は本学派の定理である。この類の関係は、形而下界に見られる自立実体と依立有(属性)のような連繋ではなく、一切の形而上下界の顕密能所の根本を成す絶対自立有たる梵、相対界においてある程度で自立でありながら、絶対界において依立有でもある万我物、そして、単なる依立的な事象と徳力の全実相界を結ぶ実在的かつ本質的に相即不離の関係である。以下、絶対無尽の自立有たる梵と相対界においてある程度で自立的でありながら、絶対界においては依立有である万我を中心に、一切世界の本来実相における本質的な依存関係の真相を4項目にまとめ、神学的な深意を示す。

一、万我は、本来の性質において、梵身の靈格的な真相であって、精神的な活現成である。動物や植物の命我は、梵の心身理法の一現と見做される業法に^{じゆん}遵じて、輪廻転生する人我の実存様態である。更に、物質は、梵身の顯然たる真相であって、人我の現前様態の基盤でありながら、神体又は人体の材源でもある。

二、一切存在の靈秘極まりない自内心たる梵は、万界の無量劫を通じて、不生不死にして自存自立しながら、完全に自由な意志によって、自らの無尽蔵の能所と万層を万我物事象、その徳力と万化として露現する。由って、梵我物の繋りは、必然的な依存関係に住じ、一切劫界の万有にとって、存在上で絶対不可欠な連結であって、天然の命脈である。梵に依存する事は、万我物事象の天性界の根本要素であって、梵とその養活なしに、何も存在する事が出来ない(dependentia existentialis 'sine qua non')。

三、万我物事象は、自らの実存経歴の一切劫を通じて、梵力に因って存養され、沁徹されながら内制されている。一方、無量の宇宙とその万有も、梵の栄光と智慧の活現成でありながらも、その本然宝蔵界を永遠に露現し尽せない。

四、万我物の立場からみる限り、永劫万界は梵に必然的に依存する運命があるが、梵の方からみると、

宇宙万有の開闢等は、梵の完全に自由な恣志^{いし}に由るものであって、梵の絶美極まりない実相界、特に、梵身能所の自由な顕現に過ぎない。従って、宇宙万有が現存しなくとも、又は、その劫期の回帰が断絶しても、梵自体の実存、永福、極楽や悟悦等の性質とその徳力の本然自性においては、悪影響が一切ない。

更に、ラーマヌジャとヴェーンカタナータを始め、ヴィシスタードヴァイタの慧哲によると、梵と万我物の関係は、両世界の本質的な実相における相即不離の依存関係だけではなく、心身^{しんしん}の如く親密な連結(śarīri-śarīra sambandha, ut relatio tra anima et corpus)を本性とする「峻別一如」的な関係である。梵我物の峻別一如という関係は、絶対の大魂魄たる梵とその活現身たる宇宙万有が、各自の本然自内性において、永遠に異なる（故に峻別すべきである）が、その本質の根本を成す存在性とその徳力自体を共有する（故に一つの如くである）という切っても切り離せない連結である。それは、梵と一切劫界の万有とその徳力の性格範囲（例えば、無限性 ↔ 有限性や遍満性 ↔ 極微性等）の根本が永遠に不変でありながら相互に異なるのに対して、その存在と徳力の質量が、どんなに変化したとしても、非存在（絶無）に転ずる事なく、膨縮、増減、隠現や実存の形態を変えるだけである。斯くして、宇宙万物の生成化育や壊滅等は、梵身における変動であって、その絶対大魂魄たる梵自体の本性に何の変化や悪影響がない。

総じて、梵と宇宙万有の関係を更に異なる見地から考察してみると、両世界において切り離し得ない本来の二相に気づく。一切存在の大魂魄たる梵とその現成身たる万我物と事象は、本然之性において、永遠に互って根本的に異なるという事実を考えると、梵は、宇宙の万我物にとって、無尽去来を通じて、不可解で不可得(paratva, inacces-sibilitas absoluta)の世界であると認めざるを得ない。一方、梵と宇宙万物は、存在の実質を共有する一如の世界(saulabhya, acces-sibilitas existentialis)である。それは、梵は、一切存在の本然秘蔵界と永遠不可得の大魂魄であって、匹儔なき無限の徳力を本然自性として有する半面、三世世界の我物事象は、梵の本然活現成身として、無量劫を通じて、梵を絶対太極の存在、究極的な本末因、万有の存養主と揺ぎない神聖な拠り処とする依立の世界であって、梵の生命をいきながら、その徳力に参ずるものである。要するに、梵は、何時も、万劫万有とその万変千化を超越しながら統理する存在者である半面、梵と一切劫界の万我物事象も又、永遠に「心身」の如く、峻別一如であって「親疎不離の世界」(paratva' et saulabhya')であるという見解⁽²⁹⁾は、一貫して、ヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタの哲学、神学、人間学（倫理学と解脱論を含めて）の定理であって教義である。

結語にかえて ～ 梵論の神学的な奥義の特色

ヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタ
梵我物峻別一如論学派の梵論は、本学派の哲学の単なる抽象的な問題を扱うのではなく、神学を基礎とする宗教（心身学道）的な世界観の中心的な命題であり、本学派の人間観、即ち、人我観、解脱観と倫理観を正しく理解するためにも、避けては通らない根本的な事柄を論弁するものである。

ヴィシスタードヴァイタの梵論は、主として、梵の本然自性の超絶的な性格を論ずる「妙相説」、梵

の超徹的で絶美極まりな靈質を主張する「大魂魄説」、梵の絶対的な本末性とその活動の道理を論ずる「因果現成説」、梵の本然自内性の絶対的な不変同一性を解く「実体説」、梵の本然秘蔵界（本性）の根本神徳を論ずる「五大徳説」、宇宙万有の天然性質を論解する「梵身説」、梵の自存自立性とその生命力の三大活現（創世、万有存養と内制的な通総）を説く「梵行三大徳説」、一切劫界の本性的な有限性を論解する「無明説」、梵の無限で無尽の活動を論ずる「大行梵説」、梵の救済的な活動を主題とする「化梵説」および、梵と一切世界の万我物の性質的等の関係を命題とする「異性同質説」と「親疎一如説」をもって、一切存在の究極的な本末終始である「梵」の性質徳力および、梵と万世万有の根本的な関係の真相を様々な見地に立って論究する。

本論文では、神学的な極意（奥義）とその人間学的な意義を念頭におきながら、ヴィシスタードヴァイタが提唱する梵論の根本的な哲理の心髄を説明した。以下、その特色を改めて指示する。

先ず、一切世界、その万我物事象、徳力とその能所の实在性および、その諸相の把握に携わる人知の性質や機能の实在性を定理とする認識論の概要を述べた。ラーマヌジャを初めとするヴィシスタードヴァイタは、人知が、本来、実存する世界の能力である以上、一切存在の形而上下界、その真相、実存の根拠と意味および、万世万有の絶対的な本末因である「梵」の性質、徳力とその役割等の真理を、全面的ではないが、正しく把握し、理解する事が出来る。よって、人類の存在的な経験（天地の隠顯的な現象、生死、苦楽等）とその自然で自発的や意図的な発想（哲学、神仏梵学、人間学、学問等）は、虚無、虚実や因縁と目的のない虚幻ではなく、不完全でありながら、根本的に真実であり、又は、真理を会得する為、根本的に正しい方便であるという立場を取る。

第二に、無始の永遠から梵に依存しながら、梵身の靈的真相の一員である「人我」の本然性質をヴィシスタードヴァイタの立場から概説した。人格的な生命とその性能を本格（天然之性）とし、極微で精妙な靈質を天然の本質とする「人我」は、人間の本体であって、梵力によって無間断に存養されながら内制されている。その上、梵行の普遍的な現成である業法に順じて、適切な身体と結合したまま、前生の果報として、現世で生きると本学派は説く。それを背景に、宗教、特に神学の心眼で人間の現実を考察してみると、梵がいなければ人間（人我）もないから、人我は、最終的に、梵に対して、責任を担う。更に、人我は、自由をもって活動するが、その活動が梵力の活現とその理法の範囲から、永遠に、一瞬も一寸も離れる事がない。それに、万代万人は、天然之性において、根本的に平等であるが、各自の真で究極的な幸不幸（解脱や輪廻転生）は、梵法機現の一つである因果縁起法に順従し、各自の任意選択を出発点とする梵存在の賛否、信愛と知行一致によって方向づけられ、実現する。その上、特に、梵を誠心全靈をもって信愛する者は、梵の恵愛によって、必ず、万我の究極的な目的である完全な解脱（「梵との明合」、即ち、人我が自他認識を極限まで拡充したままで梵の無限慶福に参ずる事）を会得出来るとヴィシスタードヴァイタは主張する。

第三章で、神秘と善美徳の極まりない梵の「性格」を唱道する「妙格説」の根本を説明し、神学的な奥義の心髄を示唆した。本学派によると、梵は、無自性無徳差で虚実的な实在でなければ、無相で^ま一本的な唯一の实在自体でもなく、無限で超絶の万徳とその無尽性能を本然の性質とし、「人格」や固定した「神格」のような性格を永遠に卓越しながら、善美で絶妙極まりない性格を本然自性の核心とする

「存在者」である。神学の立場からみると、次のような深意を指示する事が出来る。

- 一、梵は、無限で無量の徳力を本然性質とする絶対で無上の存在者である。
- 二、梵は、人我や神我の如き性格を有するのではなく、一切個我の性格（本然自内性の位格）を永遠に絶し、善美と神秘の極まりない「性格」を本有する無比の「妙格者」（妙格神、即ち、絶妙極まりない神聖で神秘的な性格を有する存在）である。
- 三、「妙格説」は、梵界の全相全面ではなく、梵の本然性質の超越的な次元の根本的な真相の奥義を表現しようとする。

第四章では、梵の超徹的な靈質を論じた「大魂魄説」の真髓を説明し、その神学的な趣旨を示唆した。ヴィシスタードヴァイタによると、梵は、一切の存在を永遠に超絶する万徳と性能を「妙格的な」本然性質とするだけではなく、一切劫界の万我物事象、その徳力と性能を無間断に活性化しながら存養し、限なく沁徹しながら盈濡し、無碍にして万有を通総しながらも内制する靈妙極まりない大魂魄（「魂」は、一切の精神とその機現を存養し司る靈力である。「魄」は、一切の物質とその性能を活性化しながら司る妙力である。総じて、「魂魄」又は、「營魄」というの）である。極微の靈我である人我や神我等のような万我と違って、梵たる靈我は絶対的な遍在我でありながら、一切の有とその限界を透脱する永遠無礙の靈我である。神学と宗教の根本対象である梵の「魂魄的な」性質は次のような教理を表示する。

- 一、梵は、妙格神であると同時に、一切の我物事象、その徳力と万変千化を遍徹しながら、絶えずに生かす靈妙極まりない命我（命を本有する梵）である。
- 二、梵は、遍在我でありながらも、一切の存在とその限界の悪影響を受けない。逆に、万世万有を絶えずに恵養しながら超脱し、通和しながら君臨する無碍の大魂魄である。
- 三、この説は、梵の「超越性」と同時に、その「内在性」（沁徹性）および、「靈質」の奥義を描写するものである。

第五章の中で、梵身の顕晦的な真相である宇宙万有の性質に関するヴィシスタードヴァイタの哲理を紹介し、その神学的な意味を簡短に説明した。この学説によると、あらゆる世界の精神のおよび物質的な万有千化は梵の本来隠現的な「身体」の多種多様な形態であって、梵力を本源としながら、その妙機に絶え間なく依存する「我物事象的」な活現成の結果である。このようにして、尽十方界の我物事象とその無量変化は、一切の劫波（空劫期→成劫期→還劫期→次期の空劫期）とその経歴の段階を通して、梵身であって、梵身の活現範囲を外れ得る我物事象一つもないと論述されている。宗教と神学の観点から言えば、宇宙万有は、梵の無限性、善美と栄光、梵力の不可思議とその能率、梵の慧智と無償博愛の精神のおよび物質的な現前成就である。一方、一切の劫界でさえ、梵の本然性質とその宝蔵界の善美德および顕密で神秘的な活動を尽す事がなければ、自分の存在と活現の為、梵を必要で不可欠な存在とする。よって、あらゆる我、物、事象、その変化や行為は、梵の恵養と慈愛の働きを究極的な抛り処としながら、梵法の秩序（生死病苦等の自然道理）とその正義（「自業自得」や「御摂理」等の理法）の範囲から、一瞬も一寸も離れる事がないと言うのも過言ではない。本説は、梵と万我物等の関係を「魂魄」とその「身体」の如く「峻別」で「不離」な事柄と理解し、天地万有が「身」の如く「心」たる梵に絶えず依存する実有の世界と見做し、梵と万有千化の親密な交わり（梵の遍在）と同時に永遠の疎隔性（梵は不依の存在であるが、宇宙万有は依立有である）を明示する教理である。

第六章の中で、梵、万我と万物千化は、各々の存在とその万徳性能の本然自内性において永遠に異な

るが、各自の存在とその徳力性能の本然実質を共有すると論ずる「異性同質説」の根本哲理とその神学的な深義を略解した。本説においては、哲学的、宗教的と神学的な意味は、複雑に絡み合うので、はっきりした境界線を引く事は困難であるが、そこに論辯されている教理の心髄を下記の如くまとめる。先ず、梵、万我（神我、人我
と動物我）と万物事象の本性的な差違の根本について：

- 一、梵は、一切の劫波を通して、自存自立的な存在であるのに対して、万我物事象は、無間断に梵に依存する実有である。
- 二、梵と他我は、不生不壊で不増不減の性格および知能を本有するのに対して、万物事象は、本来無自性であって、様々な形態を受けながら変化する万我の身体材料である。
- 三、梵は、完全で無限の徳力を本性とする唯一無二の妙格神であるのに対して、天地万有は、有限の徳力を天性とする実有である。
- 四、梵は、一切存在の大魂魄（存養主、内制主）でありながら絶対超越的な君臨主であるのに対して、一切の我物事象は、梵身の様態でありながら、梵によって浸徹され、恵養される「個体」の群である。
- 五、梵は、一切劫界とその万有事象を必要不可欠としないのに対して、宇宙万有は、梵を必要で不可欠な本末因とする。

一方、梵、万我、万物事象とその変化は、梵を絶対的な本源とし、その存在性と徳力の根本自体を、梵の寵愛によって、共有する世界である。

第七章の中で、「異性同質説」と「梵身説」等を前提とし、万世千界と梵の親疎（親密性と疎隔性）を論解する「親疎一如説」の心髄とその神学的な意義を略解した。この説によると、梵と宇宙万有には、「心身」の如く、親疎一如の世界であって、峻別不離の依存関係で結ばれているが、一切世界の万我物事象を通和しながら統理する絶対的な大魂魄たる梵が、その関係の本末因であって、究極の拠り処である。要するに、梵と万劫万有の親疎で一如な関係とは、絶対的な大當魄たる梵とその真身たる一切世界が、存在とその徳力自体の本然実質において、隙間なく親密に交わりながら、存在とその徳力の本然自内性において、永遠に隔越（疎隔・疎遠）するという依存関係である。事実上で、この「親疎一如」性は、「梵とその真身」の連結および、梵我物事象の「異性同質」性の裏面に過ぎない。この学説の根本哲理を宗教と神学の立場から再び見詰めると、次のような教義を見出す事が出来る。

- 一、梵は、万我物事象を無間断に沁徹しながら盈満し、存養しながら活性化するから、万我物等にとって、梵より親しく交わる「存在」はない。この関係は、梵と万我物事象の本然性質を本地（発生地）とし、断絶のない連結である。
- 二、一方、梵と天地万有は、各自の存在とその徳力の本然自内性（徳力とその性
能の本来的性格）において、永遠に隔越する世界である。よって、梵は、万我や万物事象に全面的に変成したり、完全に尽されたりする事がなければ、神我・人我や物事も梵に転じたり、梵の秘蔵界の善美德や至福をありのままに体験したりする事は永遠にあり得ない。だから、梵は、万我物事象にとって、いつまでも不可解、不可得で神秘の極まりない世界である。
- 三、人間の究極目的（人生観）の立場から考えると、完全な解脱とは、「無限で無尽に超徹的な梵に成り切る（変成したり、
転じたりする）ことではなく（不可能なことは、
不可能である）、梵の善美德、その栄光と慶福に参ずる事の

みである。

註

- (1) “Visistādvaita Vedānta” という語は、文字通りに「被限定者不二一元論」, 「制限不二論」や「具有不二一元論」【井原徹山, 『印度教』大東出版社, 1981('43), p. 356. 村上真宗, 「インド哲学概論」, 平楽寺書店, 1991, p. 94.】と直訳されているが, 私は, 「梵」・「万我」と「万物事象」の「実在性」と「峻別一如性」がヴィシスタードヴァイタが唱道する世界観の基本的な仕組みを成し, その思想の大枠, 本軸と心髄であるという事実を最重視し, 「梵我物峻別一如論学派」と訳した。以下, 私訳を用いる。
Dasgupta S., A HISTORY OF INDIAN PHILOSOPHY, Motilal Banarsidass, 1975, vol. III, pp.63-138.
- (2) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, transl. by Rangacharya M. etc, Munshiram Manoharlal Publ. 1989 (1889), vol. I, pp. XXV-XXXVII, 41-58, 152-160. Chari S.M.S., FUNDAMENTALS OF VISISTĀDVĀITA VEDĀNTA, Motilal Banarsidass, 1987, pp. 1-2, 22-26, 73-107, 158-183. Dasgupta S., Ibid. vol. III, pp. 165-179, 195-197, 311-326, 351-352.
- (3) “Tattva mukta kalāpa” は, ヴェーンカタナータ (1268~1369) によるヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタの形而上学, 宇宙論, 梵(神)学, 人我論, 終末(解脱)論および認識論の教理大全である。
- (4) Chari S.M.S., *ibid.* pp.22-26を参照。
- (5) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp. 59-74. Chari S.M.S., *ibid.* pp. 28-32, 187-215, 277-280. Kumarappa B., THE HINDU CONCEPT OF DEITY, Inter-India Publishers, 1979, pp. 249-261. Radhakrishnan S., INDIAN PHILOSOPHY, Princeton Univ. 1957, pp. 547-552.
- (6) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp. 58-60, 73-75 (本文意訳のまとめである)。
- (7) Chari S.M.S., pp. 278-280. Kumarappa B., *ibid.* pp. 261-329. Sinha K.P. etc, THE SELF IN INDIAN PHILOSOPHY, Punthi Pustak, 1991, pp. 89-91. Dasgupta S., *ibid.* pp. 155-164, 286-296.
- (8) 絶対不二一元論学派の‘Para-Brahman’(上位梵・高次梵)は‘Nirguna Brahman’(性質徳差の無い梵)であって‘Nirviśeṣa Brahman’(単一純然たる実在としての梵)でもある。THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp. 97-112. Chari S.M.S., *ibid.* pp. 229-242. Kumarappa B., *ibid.* pp. 164-193. Dasgupta S., *ibid.* vol. II, pp. 429-491, vol. III. pp. 165-175, 338-344. Vyas R., THE BHAGAVATA BHAKTI CULT AND THE THREE ĀCĀRYAS, Nag Publishers, 1977, pp. 5-10, 79-83. 井原徹山, *ibid.* pp. 345-347. 村上真宗, *ibid.* pp. 88-90.
- (9) 上位梵を高次梵, 下位梵を低次梵とも称する。
- (10) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp. 84-113. Chari S.M.S., *ibid.* pp. 165-175, 229-242, 304-346. Kumarappa B., *ibid.* pp. 173-179. Dasgupta S., *ibid.* vol. III. pp. 306-325.

- (11) Chari S.M.S., *ibid.* pp. 251-270. Dasgupta S., *ibid.* vol. III. pp. 175-188, 312-318. Grimes J., THE SEVEN GREAT UNTENABLES, Motilal Banarsidass, 1990, pp. 25-78, 113-124.
- (12) 「人我論の概要」を参照。
- (13) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA. vol. I, pp. 153-164, 275, 285-288, 308, vol. II, pp. XIX-XXX, li-lii, 61-64, 150-156. Chari S.M.S., *ibid.* pp. 47-52. Carman J.B., THE THEOLOGY OF RĀMĀNUNUJA, Ananthacharya Ind, Re-search Inst, 1981, pp. 124-125, 147-155. Kumarappa B., *ibid.* pp. 206-210. Dasgupta S., *ibid.* vol. III, pp. 155-158.
- (14) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp. 164, 287, 308, vol. II, pp. 6, 10.
- (15) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp. 152, 163, 173-174, 176, 178; vol. II, pp. 175, 233-234.
- (16) 存在（すること）において、全面的に依拠するという意味である。
- (17) この完全な統理とは、主人と奴隷や君臣のような関係ではなく、最愛の親子、特に、母親と胎児のような依存関係をいう。胎児の生命、存続と成育に母親の存在は不可欠であるように、「身体」の存続、活動と当身体としての成長にも、靈魂（個我）は必要不可欠な存在である。
- (18) 「身体」というのは、人体でなければ、肉体でもなく、魂が結合の時から離別までの間に、梵法現成の一位である業法に遵じて、自らの（解脱の）目的を達成する為に、「自器」として維持し、恣に使用する霊的、又は、物質的な実有である。よって、例えば、「死体」（人屍）というモノは、死の際に人我が離別した後で「人体」としての役割が終結し、もう「人体」としてではなく、単なる「物体」（物質的な結合体）である。
- (19) “Yasya cetanasya yaddravayam sarvātmanā svaāthe niyantum, dhāraitum ca sakyam” Chari S.M.S., *ibid.* pp. 251-276. Carman J.B., *ibid.* pp. 77-87. Kumarappa B., *ut supra.* Dasgupta S., *ut supra.* 図表-2も参照。

基礎文献

- THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vols. I, II, transl. Rangacharya M., Aiyangar M.B.V., Munshiram Monoharlal Publ., 1989 (1899)
- Chari S.M.S., FUNDAMENTALS OF VISISTĀDVAITA, Motilal Banarsidass, 1987
- Carman J.B., THE THEOLOGY OF RĀMĀNUJA, Ananthacharya Ind. Research Inst. 1981
- Dasgupta S., A HISTORY OF INDIAN PHILOSOPHY, vols. II, III, Motilal Banar. 1975
- Kumarappa B., THE HINDU CONCEPT OF DEITY, Inter-India Publ. 1979
- Devamani B.S., THE RELIGION OF RĀMĀNUJA, CLS, 1990
- Pereira J., HINDU THEOLOGY, Motilal Banarsidass, 1991 ('76)
- Radhakrishnan S., INDIAN PHILOSOPHY, Princeton Univ. Press 1957
- 井原徹山, 『印度教』, 大東出版社, 1981 ('43)
- Vyas R., THE BHAGAVATA BHAKTI CULT AND THREE ĀCĀRYAS, Nag Publ. 1977
- Lālā Ch., PHILOSOPHY OF BHAKTI, B.R. Publ. Corp, 1989
- Parrinder G., AVATAR AND INCARNATION, Oxford Univ. Press, 1982 ('70)
- Mādhva S., SARVA-DARSANA-SAMGRAHA (全哲学綱要), Trübner & Co. 1987 ('82)

- 島岩等訳, 『ヒンドー教』, セリカ書房, 1984
 村上真完, 『インド哲学概論』, 平楽寺書店, 1991
 湯田 豊, 『ウパニシャッド哲学』, 平楽寺書店, ³1989 ('85)
 Edgerton F., THE BHAGAVAD GITA, Harvard Univ. Press, 1972
 金倉圓照, 『インド哲学の自我思想』, 大蔵出版, ³1983 ('73)
 Sinha K.P., THE SELF IN INDIAN PHILOSOPHY, Punthi Pustak, 1991
 Grimes J., THE SEVEN GREAT UNTENABLES, Motilal Banarsidass, 1990
 Copalan S., JAINISM AS METAPHILOSOPHY, Sri Satguru, Publ. 1991
 Sharma R.M., ENCYCLOPAEDIA OF VEDĀNTA, Eastern Books, Linkers, 1993
 Lakshamma G., THE IMPACT OF RĀMĀNUJA'S TEACHING ON LIFE AND CONDITIONS
 IN SOCIETY, Sundeep Prakashan, 1990.

参考文献

- 田中美和太郎, 『アリストテレス』, 中央公論社, 1979
 Lightfoot J.B. Harmer J.R., THE APOSTOLIC FATHERS, Apollos, ³1990 (1891)
 谷 隆一郎, 『アウグスティヌスの哲学』, 創文社, 1994
 トマス・アクィナス, 『神学大全』, 山田晶 (訳), 中央公論社, 1980
 沢田和夫, 『神学大全入門』, あかし書房, 1987
 野田又夫, 『デカルト』, 中央公論社, ³1986 ('78)
 デンシンガー・シェーンメッツァー, 『カトリック教会文書資料集』, 1974
 ジェコブス・H. 『キリスト教教義学』, 聖文舎, ³1982 ('70)
 熊谷政喜 (編), 『キリスト教概論』, 新教出版社, ⁶1989 ('84)
 Hartshorne C., OMNIPOTENCE AND OTHER THEOLOGICAL MISTAKES, NYU Press, 1984
 ディフルール・L.X., 『聖書思想辞典』, 三省堂, 1983
 小川一乗, 『仏性思想』, 文栄堂, 1982
 日本仏教学会 (編), 『仏陀観』, 平楽寺書店, 1988
 常盤大定, 『佛性の研究』, 国書刊行会, ⁴1988 ('73)
 武邑尚邦, 『仏性論研究』, 百華苑刊, 1977
 高崎直道, 『宝性論』, 講談社, 1989
 福原亮敏, 『業論』, 永田文昌堂, 1982
 Kloetzli W.R., BUDDHIST COSMOLOGY, Motilal Banarsidass Publ. ³1989 ('83)
 勝又俊教 (編), 『真言の教学』, 上下, 国書刊行会, 1981
 宮坂有勝 (編代表), 『弘法大師空海全集』, II, III, 筑摩書房, ⁴1991 ('89)
 小野清秀, 『密教原理』 国書刊行会, ²1986 ('15)
 高神覚昇, 『密教概論』, 大法論社, 1989
 加藤精一, 『密教の仏身観』, 春秋社, 1989
 神森隆浄, 『弘法大師の思想と宗教』, 日本図書センター, 1976
 中村宗一, 『正法眼蔵全巻要解』, 誠信書房, ³1988 ('79)
 中村宗一, 『正法眼蔵』 四巻, 誠信書房, ¹⁸1990 ('71)
 岡田宣法, 『正法眼蔵思想大系』, 法正大学出版局, ²1976 ('54)

- 西有穆山, 『正法眼蔵啓迪』, 上中下, 大法輪閣版, '1990 ('65)
 田中 晃, 『正法眼蔵の哲学』, 法蔵館, 1982
 Abe M., A STUDY OF DōGEN, NY Univ. Press, 1992
 寺田弥吉, 『親鸞の哲学』, 太陽出版, 1984
 Chan W.T., CHINESE PHILOSOPHY, Princeton Univ. Press '1973('63)
 加地伸行 (編), 『老子の世界』, 新人物往来社, 1988
 大濱 皓, 『朱子の哲学』, 東大出版会, 1983
 LE GRANDI RELIGIONI, vols.III, V, Rizzoli Editore, 1964
 Eliade M., STORIA DELLE CREDENZE E DELLE IDEE RELIGIOZE, Sansoni Ed., 1979
 八木誠一, 『パウロ・親鸞・イエス・禅』, 法蔵館, '1986('83)
 門脇佳吉, 『道の形而上学』, 岩波書店, '1991('90)

Resumé

BRAHMANOLOGY OF HINDUISM

【Part 1】

*PRINCIPAL THEOLOGICAL CHARACTERISTICS OF THE DOCTRINES EXPLAINING
 BRAHMAN'S PERSONALITY, IMMANENTO-TRANSCENDENT SPIRITUALITY, THE
 NATURE OF HIS BODY AND BRAHMAN-COSMOS RELATIONSHIP AS SEEN IN THE
 SCHOOL OF VISISTĀDVAITA VEDĀNTA*

Generally speaking, the fundamental doctrine of Visistādvaita Vedānta's Brahmanology may be formulated as follows : Brahman, the Supreme and Absolute 'Soul' is transpenetrating, vitilizing and transcending all beings of all cosmic eons, which as the polymorphic epiphany and concretizations of His enigmatic body are inseparable from Him eternally.

This paper deals with the essentials of Visistādvaitic (begining with its actual founder Rāmānuja { 1017-1137}) Epistemology and the doctrines depicting Brahman's 'personality', His immanento-transcendent spirituality and the doctrines defining the essence of Brahman-Cosmos relationship, as viewed by well-known scholars of Indian and Christian comparative theology, philosophy and religion [i.e. Rangacharya M., Chari S.M.S., Dasgupta S., Eliade M., Carman J.B., Parrinder G., etc.] .

Chapter I outlines the essentials of Visistādvaitic Epistemology, viewing all beings as the ontic realities perceivable by our cognitive faculties.

Chapter II summarizes theory of 'psyche' (jiva, human person). The school rejects as false the

doctrines of Śankara, Vaiśeṣika, Jaina, etc. and establishes its own theory, which regards jivas as the conscient and active individuals destined for salvation, yet remaining essentially different from Brahman, and as micro-beings (anu) depending on Him in their existence.

Chapter III deals with the doctrine of “Saguna Brahman”. Visistādvaita teaches that Brahman is neither apersonal and qualityless reality, nor absolutely one pure Existence (Nirguna Brahman), but He is possessing the eternally self-sustaining existence endowed with incomprehensible marvelous ‘personality’, infinite number of unsurpassable qualities and excellent virtues as the very essence of His nature.

In the chapter IV, I’ve presented the theory of Brahman as the ‘immanento-transcendent Soul’ (Purusottama, Paramātmān). It speaks of Brahman as the absolute, ultimate and immanent Soul transpenetrating, sustaining and vtilizing all macrocosmic and microcosmic beings. He is seen here as the unique ‘Soul’, which transcends all realities infinitely in all aspects of their transient existence.

Chapter V deals with the theory of Brahman’s body (“Śarira”), which views all beings as the dynamic manifestations and polymorphic concretizations of Brahman’s eternal and enigmatic body. Brahman, as the Universal Soul, and Cosmos, as His body differ eternally in the essence of their natures, yet the body is existentially inseparable from Brahman in all stages and forms of its spiritual and material cosmicization.

Chapter VI describes the doctrine of Brahman-Cosmos’ identity and difference. It upholds that though Brahman and all other beings share in the substance of their existences, yet they retain the essence of their natures eternally different and distinct (“Aprthak-siddhi”). Brahman is viewed here as the Supreme Self ensouling and transcending all beings of all cosmic eons, which will never exhaust the treasures and potential of His unfathomable nature, nor will they ever escape the domain of His universal laws, even for a moment.

Chapter VII presents the doctrine of “Paratva-saulabhya”. It argues that Brahman remains eternally inaccessible to all cosmic beings in the essence of His divine nature (paratva), while the existence and activity of all beings depend ultimately on Brahman; and thus there is a unique existential affinity (saulabhya) between Brahman and all beings. Brahman’s perpetual inaccessibility and His enigmatic continuous activity, vtilizing all beings and phenomena of all cosmic eons, remain the mystery forever.

The principal theological characteristics of the above theories may be summed up as follows:

- ① Brahman ‘a se, in se and per se’ possesses the unsurpassable qualities as His true nature.
- ② Brahman has the absolutely unique “PERSONALITY”, which is not only ‘trans-human’ but also ‘trans-divine’.
- ③ Brahman is the eternally unique and ‘immanento-transcendent SOUL’ of all beings.
- ④ Brahman possesses the eternal and enigmatic “BODY”, composed of divine, human, etc. souls

and matter, endowed with innumerable potentialities.

- ⑤ Brahman and all the other beings differ eternally in the ESSENCE of their natures, yet all the cosmic beings share in the substance of Brahman's EXISTENCE.
- ⑥ Brahman in the 'heart' of His essence remains eternally INACCESSIBLE, yet nothing can be separated from Him even for a moment.